
魔方陣に御用心！？

オオトリページ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔方陣に御用心！？

【Zコード】

Z1260E

【作者名】

オオトリページ

【あらすじ】

ひよんな事から魔剣の主となつてしまつた少年・ヒイロ。魔剣は使えば使うほどヒイロを邪悪な魔物へと変えてしまう代物で、一度手にしたら捨てられないまさに厄介者（物）。一方、神の子とも言われる天才的魔術師である少女・カレン。ただし、やはり、彼女も天才な筈なのに、一体全体どうしたものか下位クラス魔術である筈の使い魔召喚術が一向に成功しない。さてさて、そんなトラブルドロー（厄介事を引き寄せる者）な一人が織り成す、マジック・アドベンチャー・ストーリー！！！なのだが、これは果たして、一体、

何の物語！？

第1話・魔が成す、出逢いで御用心！？

ここは地球である。

蒼く広がる太陽系のとある1つの命の惑星、地球である。しかし、ここは諸君らの良く知る地球であるうか？ここは諸君らの住まう地球であるうか？

答えは、否である。

ここは地球。確かに蒼く広く輝ける太陽系の1つの命の惑星である。だが

だが、ここは諸君の知る地球とは違う。

大地には見たことの無い動物や木々が繁殖し、海にはクジラよりも巨大な生物が生息している。森林などの緑が映え渡り、空は蒼く健やかに広がつており、ましてや科学技術の随意である飛行機などは飛んでいる筈も無い訳である。

……まあ、代わりに、翼を持つドラゴンと呼ばれる生物が飛んでいるが…。

そう、ここは諸君の知らない異なる世界。魔物があり、剣と魔法でそれと戦う。まるで、おとぎ話かゲームの様な世界なのだ。

さて、この世界についてはまた追々話す事として、諸君一見たまえ…あの白く輝く王城を、そして、その一角のひと部屋で行われている儀式を

「これで準備は整つたわね？」

「姫さま、本番におやつになるのですか？」

「ええ、もちろんよ」

そこに居るのは、純白のドレスならぬネグリジェを身に纏つた姫君と1人の女の使用人。さて、彼女たちがこんな月明かりの映える夜に何をしているかというと

「古代魔方陣による使い魔の召喚。学校で出来なかつた分、ここでやらなきやー！王室の魔法特区なら私にだつて…」

「しかし、姫さま古代魔方陣はやりすぎなのでは…？」

そこに書かれているのは、魔方陣。レンガ調の床に白、赤、青、黄、緑、黒の色で魔方陣が書かれている。

「うるさいわね！私を誰だと思つてんの？神の子、カレン＝ギースライド・シュフォンベルトよ！？それが、それがあー！……学校の魔方陣学の授業で1人だけ、1人だけ何も呼び出せないなんてえ…」

ズダンズダンと地響きが聞こえてきそつた程に純白の姫君はその場にて足踏みを繰り返す。

「でも、あれは確か、前の生徒が召喚する時に魔方陣の文字を消してしまったから…」

「そうよ… そうなのよつ… あのブリフナルト家の馬鹿男があつ… ！… ごほん、とにかく、私は今！ 欲しいの。いま、私の使い魔を召喚したいの、分かつた？」

「……はあ」

「おほん、では…。火よ、水よ、土よ、風よ、我が名はカレン＝ギースライド・シュフォンベルト」

「己の不満と欲望を隣に居合わせたメイドにひとしきり喋り終えると純白の姫君は、魔方陣の真ん中に立ち、なにやら詠唱を始める。

「全ての元素の粒子たちよ、全ての元素の精霊たちよ

次第に空から真っ黒い暗雲が城の真上にと集まりだす。月夜の晩に集まつた黒い雲は下界の全てを闇へと誘つていく。そして、次は風も無いのに部屋のロウソクの火がふつと静かに消えた。

「我に力を、我に誓約を、我、望む、魔法の源によりて、我、与えられん！」

ザザー…と黒い雲から突然の雨が降り始める。そして、突如、天高らかに成り響く雷鳴。それはゴロゴロとまるで竜の腹音の様である。

しかし、姫君はそれに構わず詠唱を続ける。部屋には異様な空気が漂い始め。夜で、雨で、空に黒い雲がかかっているというのに、それでいて部屋を照らす筈のロウソクの炎が全て消えてしまつたというのに、その部屋は明るかつた。薄暗く、氣味悪く、その部屋は明るかつた。

その薄気味の悪い部屋で姫君は尚も詠唱を止めない。次第に姫の真下に書かれる魔法陣から光の風が舞い上がり、バダバダバタと姫の持つ魔導書のページが激しくめくられる。瞬間、何かの勢^はみとキツカケを得て、辺りを日映い光りが拡がり包む。部屋を真っ白に真っ黒に、光りが部屋を拡がり包む。

先程まで激しく降っていた筈の雨は止み、城の真上に漂っていた黒い雲は消え去り、部屋のロウソクの全てに再び炎が灯る。そして、

「えつ？なんなのこの魔導書！？5万エレクトもぼったくつといで偽物！？えつ、えつ、ええ～つ！？」

「……何も起きないですね？」

「……何も起きないわね？」

それからやがて光りはついに消え去り、部屋に静けさが戻る。

「…………」

月夜は美しく。まるで、微笑むかのように純白の姫君の居る王城と、
どこか遠い土地を照らし、見つめていた。

：：：：：

太陽が燃え盛っている。

サンサンと輝くそれはあまりにも眩しそぎた。そんな眩し過ぎる
太陽の下で荒野を歩く旅人が一人。

漆黒の髪と瞳。白い肌は弱々しく輝き、その腕は年頃の男にして
はや筋肉が乏しいだろうか。この荒れる砂漠を渡る旅人とは思え
ないほどのこの少年は深々とフード付きのコートを羽織り、枯れた

大地をひたすら歩いていく。

（俺は、いま遭難している。ああ、そつなんだあ…）

彼の名前はヒイロ。

この広い世界を旅する旅人。ただ、彼が装備するは布の服に旅人ナイフと呼称される短剣。それと薬草が3袋ばかりと飲み水が小さな袋で一つ。全く、旅を甘くみている世間知らずのお坊ちゃんである。

広がる荒野の大地。

彼は果てない道ならぬ道に途方にくれていた。

（神様たすけて…）

枯れた大地に涙すらカラカラ。それに追い討ちをかけるかのように砂嵐が彼に襲いかかる。なんとも運の無い男である。

「ヒロー、ヒロー」と風に舞い砂がヒイロに襲い掛かる。前が見えない。このまま砂嵐に巻き込まれ続ければ彼は確実に死を迎えるだろう。物語はここにて終了。なんともあっけない話。なんとも早い終わりであった。

と、そんな彼の前に古びた遺跡。いつの間にやら、彼自身気が付いていなかつたようだ。

（わへ、なんでもいいや。とりあえず、避難出来れば…）

フカフカとヒイロはそんなぼろぼろの遺跡の中に入つていいく。外は砂嵐。ぱりぱりとはいえ屋根があることほいいことだ。

遺跡の中は至つて普通。風化した鳥頭の石像に犬頭の石像。それが見覚えのある武具を装備している。なんの遺跡なのだろうか？ヒイロは遺跡に入る前に付いた砂ぼこりをすぱんすぱんと音良く落とす。

入り口を確認する。未だ外は砂嵐が吹き荒れている。心無しか先ほどより強く…。

(さて、どうしたものか。遺跡じゃ、食料の確保は期待できないし。飲み水も……無いだろ? ねえ)

とりあえず、遺跡を奥に進む事にする。ぼろぼろの廊下はレンガがこぼれ、一部砂と化している。真っ四角に造られた通路は古い歴史を思わせ、何年も何年も放つてあつたらしく人の居る気配は無い。どうやら、食料や飲み水に繋がる出会いも期待出来ないらしい。

(まひ、当たり前か。砂嵐を凌げるだけマシと考える事にしよう)

ヒイロはそんな事を考えながら遺跡の更に奥へと足を運ぶ。と、角を曲がった所で突き当たり。道を間違えたか?とも思ったがここまで一歩道。いやむ、道を間違えるなど有りはしない。では、この遺跡はこれで終わり?

「……」

なんとも貧相な遺跡だ。遺跡だからとという物、作られたからには金銀財宝、世界の秘密、どこぞの王家の秘宝などが隠されていても良いものを…。この遺跡は入り口から入り、数十メートルもしない内に行き止まり。なんとも攻略しがいの無い遺跡であった。

（おかしいなあ。外で見た時には、もつと、こお、なんか有りそうな雰囲気の遺跡だったのに…。砂嵐で見間違えたか？）

やはり、砂嵐を凌げるだけマシといふ事か。

ヒイロはため息をつきながら、突き当たりの壁に寄り掛かる。歩き疲れている様で上手に力が抜けていかない。ふつと、急に体の力が抜けたズドンとヒイロはおもいつきりに壁に寄り掛かってしまう。

と、次の瞬間、ズズズツと真後ろに体が壁に吸い込まれていく。いや、これは体が壁に吸い込まれているのでは無い、どうやら壁自体がヒイロの自重により真後ろへと動いている様だ。

「うわっ？」とヒイロは後ろへと下がる体を引き起しす。そして、自

動に後ろへと下がる壁をまじまじと凝視する。

「からくり…扉？」

下がりきつた壁の後に残されたのは更に奥に開かれた道と階段。

（ダンジョン？不思議ダンジョン？王家の秘密？金銀財宝？……でも、怖いから行かないでおこう）

なんとも度胸の無い旅人であろうか？旅人とあらう者が、このようないふな心踊らせる冒険を目にして、彼は着た道を戻ろうと後ろへと振り返る。

「…グルルッ」

（……あれ、この子一体いつの間に出てきたのかしら？あれ、いつの間に天井に大きな穴が？あっ、そつかあ、あそこから出てきたんだあ？隠し扉が開くと同時に天井の扉も開くんだねえ…）

一瞬、フラツと現実逃避しそうになるヒイロ。それもその筈、振り返ったヒイロの前には、低く重い唸り声とヨダレを垂らすモンスターが一人。紫色の体。しかし、それは人といつには筋肉が異常で鋭い爪と牙が禍々しく光っている。そして、睨み付ける瞳は血走らせ、ヒイロを今にも食い殺そうといわんばかりではないか。

「ガアアアーッ！」

「ひいいつ？」

途端、モンスターは有無を言わざずヒイロへと襲い掛かる。

「ギヤシヤヤヤヤツ！」

恐ろしく尖った爪が遺跡の壁を破壊していく。もちろんそれはヒイロを狙つてのもの。しかし、爪はヒイロが避けた為に通り過ぎ遺跡の壁を破壊していく。

一方、突然のモンスターからの攻撃に身を低めて避けたヒイロだが、全く足が動こうとしない。ガタガタと体が震える。

（なに？なになに？なんでいきなり、ダンジョンモンスターとバトルになる？訳が分からんぞ！？逃げなきゃ… そうだ、逃げなきゃ！）

「グルルアアアツ！」

やつとの思いで腰を上げるヒイロ。彼は後ろに開かれた道を走り、階段を飛び降りるように下つていく。降りた先の道をヒイロはひたすらに走り、モンスターから逃亡する。と、必死に逃げるヒイロは植物が異常に生息している広間にへと出でてしまつ。

下つた階段から見れば、ここは地下。しかし、地下にこれ程の植物が生息しているとは…。太陽の光りも届かないはずなのに、水だつてここは荒野砂漠の真ん中？なぜこんなにも植物達が並々ならぬ大きさで生息しているのか。

（なんだよここ？なんでこんな…）

ヒイロはながら地下のプチジャングルに息を飲む。

「ガアアアアーツ！」

と、あまりにも見事な縁に呆けているヒイロの後ろからモンスターの叫び声。なんともしつこい。ヒイロは、植物の異常に生息している広間を抜けて、更に奥へと進む。途中途中に小さいのや、中くらいのと無数の広間が立ち並んでいた。

とりあえず、ヒイロは一直線に見える大きな扉の広間を目指す事にする。あれくらい大きければ、いくらモンスターといえど破壊はしきれないと考えたのだ。

（あの中に入りさえすれば…）

心臓が爆発音を上げるかのように高鳴りをあげる。息が苦しい、喉が焼けるように痛い。胸が肺が喉首が千切れてしまいそうな感覚に苛まれる。

「…………はあ……はあ……はあ……」

ヒロがこの遺跡の大広間であろうか。ヒロは大きな扉の隙間から体をグイグイとねじ込みその広間まで入っていく。

「…………はあ……はあ……はあ?……おつ……おおお?..」

ヒロがその大きな扉の広間に入ってすぐ見えたもの。それは水が天から流れ落ち、花は室内だといつのに多数に咲き乱れ、樹々が生い茂っている光景だった。

そして、広間の真ん中は床が高らかにせり上がつており、入り口からの階段が備わっていた。そして、その高く上がった床の周りには円を描く湖。まあまあに高くてよく見えないがどうやら上には何やら台座があるように見える。そして、そこにまた何か

「ギャルアアアーツ！」

ドクン！？と心臓と体がはね上がるヒイロ。あの紫のモンスターだ。どうやら、植物の広間を通り抜けてきたらしい。ヒイロは後ろを振り向き、少し開いていた大扉を閉めようと力を入れる。だが

「つと、しまつたあーっ！？隙間があつたからなんとか入つてこれたけど、この馬鹿デカイ扉を閉められなければ意味がないっ！？」

そう、閉まらないのだ。

ヒイロは隙間から身を捻り込んで入つてきただけであり、あの大きな扉を開いて入つてきた訳ではない。というか、人の力でこの大きくそびえ立つ扉が動かせようものか？

ここにきてようやく自分の過ちに気付いたヒイロ。閉められ無いのならば意味が無い。モンスターは力ずくで扉を壊し入つてくるか、ヒイロが入ってきた隙間を崩して、穴を開けるかで入つて来よう。だが、自分はもはや出ることも籠ることも出来ない状況。絶体絶命である。

ズドンズドンと低い音。

モンスターが扉の前までやって來たのだ。モンスターは何度も何

度も扉に体当たりを繰り返して、扉の隙間から次第に大きな穴を開けていく。

「だつ、ダメだ。このままじゃ、殺される…」

言い様のない恐怖がヒイロを襲う。もはや、立つ事さえままならない。足や腰を引きずり、彼は真ん中に高くそり上がる床の階段を上がる。ズリズリとその格好は惨めで不様であった。

「……もし、そこの人間」

「！？」

と、階段を上へと上がりきったヒイロ。そんな彼に何者かの声がかかる。

「だ、誰だ？」

ヒイロは辺りを見渡す。人がいた。この遺跡には自分以外に人がいたのだ。

すがるような気持ちで、ヒイロは辺りを見渡す。助けて、助けて、助けて、と声をかける人間を探す。だが、そこにあるのは台座に刺された大きな剣と床に生える草花だけ。人間など自分以外1人もいない。

「お困りのようだな？ 我も実は困つてある。どうだろ？ 我の頼みを聞いてくれたら、お前の願いを我が叶えてしんぜるが？」

「！？」

まつたく、何の冗談だ？ 先ほどからヒイロに話かける人物。いや、これは人物といってよいものなのだろうか？

「ええい、ダンジョンの見張りモンスターに襲われておるのだろ？ ならば、我を抜かんかい！？ 我は、ギースライド・フォン・ダークブリンクガーリ・アイゼル。またの名を、魔剣・アイゼリウス。我にかかれば見張りモンスターなど赤子も同然！」

そう、モンスターに襲われ、息も絶え絶えに逃げてきた先でヒイロが見た物は、喋る剣、人の言葉を話す魔剣であった。

「さあ、人間。我を抜け！力が欲しいか？力が欲しいのだろう！？ならばくれてやる！！抜けっ！！我を振るえば、大地は唸り、海は割れ、空はそなたに平伏すであろう！我是魔剣、我是最強の剣！我を抜けば、そなたは今こより魔王の称号を与えられん！！」

剣が高らかに声をあげる。ビンからともなく出でてくる声はヒイロの耳にうるさいくらいに入つてくる。魔剣。これを抜けばモンスターを倒せる？こいつがあれば最強の力を得ることが出来る？

「ほれ、はよ抜かんか。我は早く外に出たいのだ。あと綺麗な姉ちゃんたちとイチャイチャしたいのだ。助けてやるから、早く我の封印を解け、ノロマー！」

正直抜きたくねえ。

このままへし折つてしまおうか？ヒイロはリアルに怒りと苛立ちにこの魔剣への殺意が沸く。が、いまはそれ所ではない。逃げるか戦うか。前者は無理で後者は……。

「お前を抜けば、俺は助かるんだな？」

「我は魔剣ぞ？ 我に倒せぬ者無し！ 所詮、見張りモンスターはグリフォンであろう？」

「……え？ 違うけど？ グリフォンって鳥だろ？ あれは人型だぞ？ 紫色で筋肉マッチョで鋭い爪と牙がグワワアって目が3つ目だぜ？」

「……え？？」

「ここで食い違つ何か？ 一体、何がどうなつてているのか。 ただ、魔剣はそれ以上なにも語らなくなつた。」

「て、なんでだよ？ 助けろよ、倒せぬ者無しなんだろ？」

「……」

「ギュアガアアアア！」

「ちよつ、なに黙つてんだよ？助けるよ、助けんかい、助けんか口ラーツ！？」

「……だつて、グリフォンだと思つてたもん。グリフォンだと思つてたから……人型つて、たぶんそれ、バーサーカーデビルじやん？紫色じやん？筋肉じやん？古代モンスターじやん？あれば、並みのモンスターじやないもん…。痛いもんあーゆつのと戦うと…」

「最強なんだろおーつ！？戦えよおーつ！？倒せよおーつ！？なんだよ痛いってえーつ！？」

バタンバタンとその場に足踏みを繰り返すヒイロ。だが、その瞬間、遂に扉の隙間に大きな音と共に大穴が空いた。

「つわおーつ！？」

あまりの衝撃に声を上げるヒイロ。次第にゆづくつとだが確實に

「ひへと近付いてくるモンスター。」

「グルルアツ！」

「ウワアアアー…ヤバいよ、来たよ、ビックリおもつねーっ。」

「ひくつひくつと階段を上がつてくのモンスター。もはや、
ひもでか…？」

「しょーがない。まず、我を抜け。話はそれからだ」

ガクガクと恐怖に体を震わせていると魔剣がさう言つてきた。ヒ
イロは急いで台座に刺さる魔剣を手に取る。

「いべぞー！？」

「よかぬい…」

「……ああああーっ！」

瞬間、ガキーンと乾いた金属音が部屋に木霊する。そして

「……なあ？」

「……なんだ？」

「抜けないんだけど？」

「そりだな……」

「そうだなって、なに？抜けなきや意味無いじゃん？なんで抜けないんだよ？ああ、やっぱ戦う気なんて最初から無いんだ、お前！」

？」

「馬鹿な？我とて約束事ぐらい守るぞ？しかし、抜けないのは予想外だぞ？お前の魔力が足りないのではないか？魔法使ったことあるか？」

「知らねえよ、魔法なんて！生まれてこのかた魔法なんて使ったことなんてあるもんか！俺は……俺はこの世界の人間じゃねえんだよ！1週間前にこの世界に突然連れて来られただけなんだよっ！！」

「ふん、なるほど、魔力のマの字もない訳か…」

「んだよ、駄目なのかよ？魔剣を使うには魔力が必要なのかなよ？」

ここに来て更に予想外の出来事。抜けと言われて抜いたが魔剣は抜けず。もう、逃げる事も戦う事も出来なくなってしまった。

「ガアルル…」

モンスターは階段を上がつてくる。ヒイロとの距離は数メートルもない。モンスターが1歩1歩、歩くたびに重い振動がヒイロの体の底に響き渡る。

「もう……だめだ。あは、あはははは。なんで？なんでいつもこうなんだろ？・高校の喧嘩の時も、急に変な世界に連れてこられた時も、その先でこと」とく俺には悪いことが起きる。グスツ……もう、いや。どうせ、ずっとこうならいつその事…」

これが死に際の走馬灯だろうか？

禍々しい程のモンスターを前にしてヒイロの頭にはこれまで見てきた自分の人生が思い出される。まったく、思い出しても良い人生ではなかつた。ふるふると肩が震える。恐怖のあまり涙よりも先に、下から水が流れる。

「これも、運命か…。我が封印されて、約数百年。これを逃せば、次はいつになる事やら…。魔力がある者ならば仮契約で封印を解いて貰おうと考えていたのだが、そもそもにかんか」

そんなヒイロの姿を見てか魔剣は何やらぶつぶつと独り言を放つ。

「仮契約で封印を解いて貰つたあと、その仮契約をも解いて破棄して貰い、我一人の自由な生活をと思っていたのだがな…。結局の所、我は誰かの配下として存在せねば意味を成さぬという事が…。なら

ば、よからう！我も覚悟を決めよ！」

「ガガガガガ」と地鳴りが部屋に響き渡る。そして、大きく部屋が揺れ始める。部屋の隅々に掛けられるランタンの火が激しく燃え上がり、天からの水はきめ細かく飛び舞う。土に生える草花は踊るようによらゆらと揺れ始め、そして、風が心地よく部屋を吹き抜けた。

「これは、簡単に切つて離される仮契約とは違うぞ！？ 我は主あるじが死ぬその時まで仕えよう！ 我は主の為に！ 我は主の野望の為に！ 我が名はギースライド・フォン・ダークブリンクガーライゼル！ またの名を魔剣・アイゼリウス！ ……さあ、契約だ！ 我を呼べ！ 我をその手に取りて、その名前を叫べ！ 我が名は！？」

未だ揺れる大地。魔剣に触れるヒ一口の腕が輝き光る。真っ白な光りと真っ黒な光り。腕が燃えるように熱く輝く。

「えつ、なんだつて？」「ええと、さ、せいいすらいとあいぜる？ あつ、ふおんー？」

「主よ、死にたいのか？ 死にたいのか？ 死にたいのか？ ん、死にた

いのか！？

「わあーっ、やめてくれーっ！？なんか感情の無い声でそんな言葉を呴かないでくれー！？だいたい、長いよ？お前、名前長いよおお一つ！？」

「グオオオオオーツ！！」

と、ヒイロ達がまるでコントの様な会話をしていると目の前には既にモンスターが迫っていた。そして、その巨大な口を広げ、ヒイロに襲い掛かる。

「うわあーっ！？」

「ええい、主よーなんでも良いー主が呼び易い名前で我を呼べええ
ええーつー！」

「へりそ、カツコ懸りいだらうーがー！」で、言えなきや、カツコ

悪いだらうがああーっ！

モンスターの口が牙がヒイロの目の前まで迫つてくる。見たことの無い程に禍々しいその牙。見ているだけで死にそうになる。

だが、ヒイロは目を瞑らない。彼は瞳を見開き、前を見据えて名前を呼ぶ。静かな心と高ぶる心の下、その名前を叫ぶ。

「ギースライド・フォン・ダークブリンクガ＝アイゼル！ 我が、下部と成りて、今その力を解き放てえつ！ うおおおおおおおーーっ！」

次の瞬間、部屋から音といつ音が消える。無音となつた部屋は耳鳴りが木靈する。そして

白と黒の光りの爆発が見え、全てを塗り潰していった。

「…………つ？」

どれほどの、時間が経ったのだろうか？

光りが鎮まり、通常の光景が見え始める。ヒイロの田の前には灰と化したモンスター。その形は生きていたその時のままの形で生きしく、だが、それは確実に灰と化していた。

「これが……魔剣？」

「そう、これが我だ。手にすれば、世界は主の思うがままに。大地は唸り、海は2つに割れ、空は主に平伏すだろ？」

一体、何が起こったのか。事の発端である当のヒイロにも何がなんだか理解が出来ない。

魔剣の名前を呼んだ時、魔剣の刀身を台座から抜き放った時、体が熱くなり胸が狂うほどに冷たくなった。そして、黒と白の光りが見える全てを塗り潰した後…。

見えた物は、既にその体を灰と化したモンスターの姿であった。

（まるで、溜まっていたエネルギーがいきなり放出された様に爆発したみたいだ…）

その強大なエネルギーにあてられてモンスターは灰になってしまつたのだろう。まるで、密室に溜まつた炎のエネルギーを解き放つたバックドロフト現象の様に…。

これが魔剣という物なのだろうか？これが魔剣の力なのだろうか？ヒイロはただただ自分の手に握られる魔剣をボーッと見ていてことしか出来ないでいた。

「では、主、行こうか？」

「えつ？ど、どこに？」

「ん、主は旅人であるう？ならば、我はその旅に同行する。我は主の物なのだからな。主が不幸を呼ぶ体質ならば、我が旅先で起こるその不幸を叩き切ってくれようぞ」

「そ、そつか……あ、ありがと」

「あと、早く外に出て若くて綺麗な姉ちゃんたちトイチャトイチャしたい」

「……テメエ、それが本音か？」

かくして、奇妙な物語りが小さな歯車の如く廻り始め出した。小さく小さく廻る、それは一体、何の物語り？ここに1人の何の力も無いであろう凡人が、世界をも支配出来る力を持つた魔剣と契約を期してしまった。さてさて、このヒイロと呼ばれる男。一体これからどんな物語りをつむいでいくのであるつか。物語りはまだ、始まつたばかりであった。

第1話・魔が成す、出逢いで御用心!-?（後書き）

「んにちは。

この魔方陣に御用心は、短編のつもりで書いた小説なのですが…。
なんか、自分でも続きが読みたいなあ…と思つてしまい、おもいき
つて連載物にしてしまった小説です。

とりあえず、他の小説みたいに無茶苦茶にならないようこ心を付けて
書き上げて行きたいと思います。どうか、皆様、応援と御支援の
程をよろしくお願ひ致します。

第2話・月夜の森で、御用心！？

「こゝは地球。

蒼く広く輝く太陽系の一つの命の惑星、地球。だが、こゝは諸君らの知る地球とは違い。魔法と剣とドラゴンの世界。そう、こゝは、諸君らの知らない異なる世界なのである。

「こゝは、どこだあー？」

謎の遺跡で世界をも支配出来る力を持つた魔剣を手に入れた少年ヒイロ。ようやく、枯れに渴れる荒野砂漠を抜けた彼だが、抜けたそこは緑生い茂る森。ヒイロは果てない道ならぬ道に途方にくれていた。

「主よ、我らいつになつたら人の居る村に着く？」

「へ、ヒイロが果てない道ならぬ道に、つだーと途方にくれてこむと背中に差した魔剣が声をかけてきた。

「じりんー。」

「じりん…と、威張られてもなあ」

未だ、道ならぬ道に途方にくれる主にため息をつく魔剣アイゼル。そんなアイゼルのため息にヒイロは皮肉を口にする。

「けつ、お前はびつせ、村の女の子が田舎になんだらーが?。」

「違つー。」

「くつ?。」

なんとも予想外な返答が返ってきた。ヒイロはそんなアイゼルの予想外の返答に少々驚きを隠せず間抜けな声をあげてしまつ。

「そりゃ、わりい。俺はつつきつ……」

魔剣アイゼルの意外な言葉にヒイロは、ややバツ悪そうにアイゼルに頭を下げる。

「若くて綺麗な姉ちゃんたちだつ……」「へし折るぞ、この馬鹿剣！？」

まったく、なんなんだ「イツはー？やはり、魔剣アイゼルはこういう奴なのか…と、ヒイロは苦笑しながらも、どこかアイゼルに親しみを感じながら道ならぬ道を進む。

しかし、もう直ぐ日が沈んでしまつ。なんとか、日没までに近く

の村まで辿り着かないと、今日はこのモンスターがウサウサ怪しき
な森で野宿をする事になりそうだ。

(それだけは勘弁して貰いたいなあ…)

そんな事を思いながらヒロは殆ども無く森を進んで行くのであ
つた。

：：：：：

夜である。

フクロウと呼ばれる鳥が鳴き、月夜で明るく、気持ちの良い夜である。

「ほとほと、主は月明かりの下で野宿するのがお好きとみえる。なんだ、主は人見知りする派か？そんなんでは、可憐こ子ちゃんと仲良くにゃんにゃん出来んぞ？」

アイゼルはぐつたりと、そこらに生える木によたれかかるヒイロに皮肉を語る。すると、ヒイロは体をあげて、自分の足下にあったアイゼルをぱーっと投げ捨てる。

「ぬわ？なにをする、主よ？皮肉が氣に食わなかつたか？なりば、何を食う？土か？食料も無く、水も昨日で無くなつたのであらう？
私は主を心配してだなあ……」

「可憐こ子ちゃんとか……にゃんにゃんとか……死語だから……オヤジじやん……」

そんなアイゼルの言葉を聞いてか聞かずか、ヒイロは「うう」と横になつたまま、それ以上何も語る事をしなくなつてしまつた。

（ぬう、我は本当に主が心配なのだぞ。我は魔剣だから、別に飲まず食わずでも生きてゆけるが主は人間であろう。何日も前から食べ物を口にしていないのであるう~）

そんなヒイロにアイゼルは、心の中から心配をする。成り行きとはいえ、契約を期した主。そんな、主が死んでしまう事はアイゼルの本意では無い。

だから、どうにかしてヒイロには頑張つて貰いたいと思つているのだが

（……もつといづ、必死になつても良こだらうに？なんて諦めの早い御仁なんだ我が主は…）

だが、そんなアイゼルの心配とは余所にヒイロは早くも寝息を立てて眠りについてしまう。夜は淀み、深深く深まつていく。

：

：：：：

「あ…るじー主…あああるうじーーいっ…」

「つえいつ？」

ヒイロは何やらアイゼルの大声に起しそれてしまつ。空はまだ月明かり。 いまだ、時刻は夜中のようだが…？

「…んだよ、まだ皮肉り足りねえのかあ？ふあ～…」

ヒイロはアクビをしながら大声で自分を起したアイゼルに文句を言つ。 だが、それに反してアイゼルは何やら真剣な口調でヒイロに話をする。

「主、モンスターだ。この森の何処かでモンスターの気配がする。
しかも…」

「んだよ、嘘つけ。全然、モンスターなんか居ないじゃねえか？何
処にそんな…」

「グオオオオ——ン！」

と、ヒイロが一度目のアクビと背伸びをしようとした所。何処か
らともなくモンスターの雄叫びが聞こえてきた。近い。だが、ここ
ら辺りから聞こえてくる雄叫びではない。

「ん~、まあ、お前の嘘じゃないのは分かった。ゴメン。でも、全
然大丈夫じゃねえか？近いけど遠いみたいな？」

ヒイロはそんなモンスターの雄叫びを聞きながら、地面に投げつ
ぱなしにしていたアイゼルを自分の元に寄せる。

「違うのだよ、主。襲われている。モンスターと別に人の気配が感じられる。たぶん、同じ場所に2つの存在はある。だから、誰かがモンスターに襲われている！」

「つー？」

ヒイロはアイゼルのその言葉に顔を強張らせる。襲われている？誰が？何に？ヒイロは立ち上がり、突然、勢い良く走り出す。

「主、何処へ行こうといつのだ？」

そんなヒイロにアイゼルが疑問を投げ掛ける。

「決まつてんだろ？……逃げる！巻き添えを喰らわん内にな！誰かが襲われているって事は、移動しているって事だろ？ほら、雄叫びもなんかさつきより近くに聞こえてくるしさ…」

どうやら、ヒイロのその言葉の通りにモンスターの雄叫びは聞こえてくる毎に近付いて来ている感じであった。

「しかし、主よ、助けに行きはしないのか？」

そこで、アイゼルはヒイロにそう問い合わせる。そう、てっきり自分は主が襲われている人間を助けに行くものと思っていたが？と、問い合わせたのだ。

「アホか、誰がそんな危険な事をするか？ガキのケンカと違つんだぞ？それに…」

「それに？」

「それに…助けに行って、裏切られて、逃げられて、また一人ぼっちになるのは嫌だ…。余計な正義をやって、馬鹿を見るのは、もう嫌なんだ！」

そう言いヒイロはひたすら、モンスターの雄叫びから逃げるよう

に森を走り抜ける。余計なんだ。正義をしたって意味がないんだ。裏切られて逃げられて、それで馬鹿を見るのは自分なんだ。ヒイロはそんな事を心に思い一心不乱に走り抜ける。

暗い森道は険しい。舗装されたコンクリート道とは違い、でこぼこで足場が悪く。森の枝など草木がヒイロの行く道を邪魔する。そして次にヒイロの行く手を邪魔するものは、ガサガサッと草木から飛び出していく何か

「つはー?」

ヒイロは飛び出してくる何かに驚く。走るヒイロの前に飛び出してきた何か、それは

「つあ!?た、助けて…助けて下さい…モンスターに…モンスターに襲われているんです!お願い、助けて…」

なんという事だろ?。ヒイロは目の前の光景に目を疑う。モンスターの雄叫びはまだ向こう。だから、襲われている誰かもまだ向こうにいると考えていたのに…。なんという事だろ?。そのモンスターに襲われ助けを求める女性は逃げるヒイロの目の前から出てき

てしまったのだ。

（うそだろ？ なんで、なんで？ だって、まだ雄叫びは向こうに…なんで襲われている誰かが俺の目の前に…？）

これが、この男。ヒイロと呼ばれる男の運命である。不幸と呼ぶなら、そうであつて。幸運と呼ぶなら、そうである。かくして、ヒイロはモンスターに襲われる女性を助ける事となつてしまつ。

「お願い…妹が…妹が襲われて…私を助けるために囮に…」

フラフラッと女性がヒイロに歩み寄る。モンスターに傷つけられたのか肩には痛々しい程の引っ搔き傷。服はぼろぼろ、顔は泥だらけ、しかし、そんな彼女は必死にヒイロに助けを求めていた。

（じょ、「冗談じゃねえ…。なんで、なんでいつもこうなる？ なんで俺が、なんで俺だけに…嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！ 俺は、俺は…）

「主よ……来たぞ！」

アイゼルのその言葉と同時にモンスターの雄叫びがヒイロたちの
真後ろで上がる。

「アオオオーン！」

そこには居たのはオオカミの群れ。だがしかし、それをオオカミ呼ぶには禍々しい程の姿である。色は紫、瞳は眼球があるのか無いのか黄色に染まり、その禍々しい程までに尖った爪と牙は血のように真っ赤に彩られている。

「グルルル」

だらだらと垂らすオオカミのよだれはより一層、ヒイロに恐怖といつ感情を思い浮かばせせる。

「なんとこや…王よ、ここつらただのオオカミでは無いぞ」

そんな恐怖に駆りされているヒイロにアイゼルが何やら驚いた口調で話かける。

「こいつらは、古代モンスターだ。主よ、氣を付けよ！」

「遺跡の奴と同じって訳かよ…」

オオカミたちはその大きな体でヒイロたちに近付いてくる。一步、二歩、こちらを見ながらオオカミたちは確実にヒイロたちに歩み寄つてくる。

「戦う覚悟あるのか、主？」

アイゼルはヒイロにそう問い合わせる。オオカミたちがこちらを睨んでいる。今にも飛び掛かって来そうだというのにアイゼルはヒイロに問い合わせた。

「たたかうかぐじ?」

ヒイロはその問い掛けに少し考える。

戦う覚悟? そんな物、有る訳が無い。産まれてこのかた、命の取り合ひなんてしたことが無かつた。必要無かつた。家で過ごして、学校に行つて、勉強して、遊んで、家に戻つて、1日が終わる。1週間前までの自分はおおよそ、そんな感じだった。

だから、高校に入学して、卒業して大学に行つて、会社に入つて、その後もそういう人生が待つていていたと思つていた。だから、だから、こんな訳も分からぬ世界で命を賭けて戦うなんて思つてもみなかつた。

(だから、俺は元の世界に帰る為に旅をしてるんだ。命の取り合いなんてしないでいいあの世界にあの日本に…。でも、駄目なのか? やっぱり、ここではこんな風に命を賭けないと生きていけないのか?)

アイゼルの問い掛けに、目の前の大きなオオカミたちからの恐怖に、ヒイロは何が何だか分からずそんな事を考える。一体、何なんだ？何故、自分はここにいる？何故、自分は命を賭けて戦わなければならない？

（逃げるんだ。俺は平和な日本育ちの子供だから、戦いなんて、命の取り合いなんて…）

「ガルシャアア！」

だが、時は待つていてくれない。オオカミたちは待つてくれない。一斉にヒイロたちに飛び掛かってくるオオカミたち。

「つあー…うわっー…ひいっー…あぐあー…」

「主よ、避けるばかりでは意味が無いぞ！我を抜け、我を抜けば主は魔王の如き力を…」

「ハルセー！」

「…？」

ヒイロの突然の怒号。その突然の怒号にアイゼルは驚いてしまう。

「俺は戦えねえ…俺は日本人なんだ…平和の象徴なんだ…」

「主よ、震えて…いるのか？」

禍々しいオオカミたちを目の前にしてヒイロはガタガタと体を震わせている。

「主よ、そなたは戦う事が怖いのだな？」

「グオルルル」

「自分が傷付く事より、他人を傷付ける事に恐怖するといつのか?
主よ、そなたは…」

月明かりにて、男は恐怖していた。

戦わなければならぬ状況に?自分が殺されて死んでしまうかも
しない状況に?訳も分からず見知らぬ世界に連れて来られた状況
に?答えは否、であり、その通りである。

彼は恐怖していた。戦わなければならぬ状況に、殺されて死ん
でしまうかもしない状況に、訳も分からず見知らぬ世界に連れて
来られた状況に。

だが、いま彼が恐怖している事はそれだけではない。それだけで
はない恐怖。それは、誰かを傷付けてしまう自分に対する恐怖で
ある。たとえ、それが禍々しい程のモンスターであつたとしても…。

「そりだよ、怖えんだよ。俺は今まで何かの命を自分の手で殺したことなんて無いだよ。そりや、虫なんかは故意にでは無いにしろ殺してしまった事はあるわ。でも、これは動物だ。モンスターでも動物だ。俺は、俺は…」

「虫と動物の何が違う？命に上や下の優劣があるものか？主は今まで何を食べて生きてきた？他の命である？肉を食べ、野菜を食べ、他の命を食してきたのだろう？」

「だけど、俺は自分で殺してなんか…」

「同じだ。誰かが造り添えた食だとしても、それを食べたのは主だ。命は食べて生きていいく。それが、命だ。そして、こやつらも…」

「ああーっ！？」

「…？」

ヒイロは叫び声に驚き、そちらを振り向く。女性が襲われている。先ほどの自分に助けを求めた女性が、オオカミたちに押し倒され、いまにも噛み殺されようとしていた。

しかし、それを見ていてヒイロは、なにも出来ない。いや、しようとしない。

「主よ。それでは、食べられる側は捕食者の言つがままに殺されなければならないのか？いや、答へは否であるつ？それは、言い訳かもしれない。それは、都合の良い言い訳かもしれぬ。だが、命に優劣は無い！」

そんなヒイロにアイゼルは、言葉を告げる。いまの状況に、いま何をするべきか、いま何を考えるべきかを…。

「死にたくないから、捕食者に牙を立てる。その為に誰かを傷付ける。弱肉強食とまでは言わぬ、だが、生きとし生ける者の全ては生きなければならない。足搔かなければならない。逃げるな、戦え。理由などいま考えるな。いま己の命だけを考えて戦え。その過程で助けたい者を助ける為に戦え！」

「……意味……わかんねえよ……お前の話……」

まったくもつて内容の意味が分からぬアイゼルの話。何が言いたいのか、何を言おうとしているのか、ヒイロにむさっぱりであった。

（俺は命を奪いたくない。でも、結局俺は命を食してきた。奪つてきた。だから、俺もこのオオカミたちの食として殺されなければならぬ。それが自然の摂理だ。でも、俺は死にたくない。元の世界に日本に帰りたい）

ヒイロはゆつくりと腕に持つたアイゼルを巻いていた布から取り出す。黒く輝くアイゼルの刀身。闇に見事に溶け込んで、そして、月明かりにその刃を光らせる。

（理屈なんていらない。死にたくないから戦つ。捕食者に牙を立てはいけないなんて理由はない。傷付けるのは怖い。それは、いけない事だと教わってきた。でも……）

オオカミたちが女性を襲い、彼女の上に乗り掛かっている。必死に抵抗するその女性。そのおかげか、いまだ彼女にオオカミの牙は立てられていない。

(死にたくないから戦う。命を軽んじてはいる訳じゃない。ゲームみたいにただ楽しんで奪う訳じゃない。生きるため、進むため、それでもやつぱり命を奪う事はやつてはいけない事……だけど…)

「覚悟が出来たな、主よ？」

「…ああ、出来た」

ヒイロはアイゼルを持ち、オオカミたちに向かい走り出す。

「ガアアアア！」

そこへ、1匹のオオカミがヒイロに飛び掛かる。

瞬間、ヒイロは飛び掛かるオオカミに對して即座に身を翻し、横に体を位置取る。そして、未だ空中に漂うオオカミ田掛けて縦に剣を奮う。ドスッといふ音と共にオオカミは声も無く地面に落ちる。

頭を失った個体は、もはや、立つ事はないであろう。

「ギイガガガーッ！」
「グルガアアアッ！」

次は2匹同時。右と左から、冷めるよつた牙と爪が襲いかかる。

「うわおおおーっ！」

今度はその2匹に対して、ヒイロは剣を横一線に引く。生暖かい液体がヒイロの顔にかかる。ドスンドスンと地面に何かが落ちる音。ヒイロの足の下には2匹のオオカミ。もはや、その瞳に光は無い。

「つー?……グルル」

3匹。オオカミを3匹倒した所で女性に乗り掛かっていた一番、体の大きなオオカミがこちらを見る。そのオオカミの片目は潰れ、一文字の傷痕となっている。

「主、あれがリーダーだ」

どうやらアイゼルの言つ通りのようだ。そのオオカミがこちらに向かってくると、周りのオオカミたちも同じようにこちらに体を向ける。

「残り4匹だな、主よ。さて、ここいらで一発景気良く行くか?」

「なんか策があるのか?」

「あるとも……」

オオカミたちがつい、まづくつとヒイロの周りを囲むように近寄る。そして、4匹のオオカミがヒイロの前後左右に位置取った。

一斉に飛び掛かってくるつもりだ。1匹、2匹での攻撃や馬鹿正直な前方からの攻撃では、ヒイロの剣で一斉に斬られると考えたのだろう。だから、困んだ。逆に自分たちが一斉にヒイロを襲う為に……。

これでは、成す手無し、絶体絶命である。剣を奮つても、1匹に奮った所で他の3匹に食い殺されてしまう。だから、ヒイロは聞いた。アイゼルに策があるのかと聞いたのだ。

「で、それは？」

「ふつ、魔法に決まっておるわ~」

『ガルルアアアアアアーツ！』

アイゼルがそう言つた次の瞬間。オオカミたちが一斉にヒイロ曰掛けて飛び掛かる。だが、ヒイロは逃げ出さない。ただ、真っ直ぐにリーダーであるオオカミを見据えて、アイゼルを高らかに月夜へと掲げて唱える。

それは聞いた事の無い言葉。発した事の無い言葉。だが、ヒイロは唱えた。そう聞いたように魔法の呪文を唱えた。

そして、アイゼルから『轟つ！！』と放たれた燃え盛る炎。ヒイロを包み、四方に飛び出す火炎が4匹のオオカミに襲い掛かる。先に飛び出したオオカミたちは避けられない。真っ直ぐヒイロに飛び掛かったオオカミたちに燃える業火が襲い掛かる。

「「わよおおおお……おおお……」」

飛び掛かるオオカミたちは燃える業火に襲われ、ヒイロに辿り着く事なく、ヒイロの体に触れる事なく、その場に打ち落とされる。

「……おおお…オオオ……オ……」

パチパチと燃えるオオカミたちは声をあげる事も出来なくなる。そして、その命の炎が業火に取り込まれるが如く消えていく。そんな四方に燃える炎の真ん中にヒイロが佇む。

「我を、殺せると思つなよ、下郎！ 我を誰だと思つて居る？ 我は、
我は……我は……」

その体を燃やし、命を消したオオカミたちの前にヒイロは何かを呴ぐ。そこに魔剣を奮つヒイロが燃えたオオカミたちに何かを語つていた。

「あの……た、旅人さん？」

「……？」

と、そんなヒイロに話かける女性。先程までオオカミに襲われていた女性である。四方に燃える炎の真ん中で何かを語っていたヒイロに彼女は話をかける。

「……我は……おれ、俺は……」

「あのっ……あのー！お願いです！助けて頂いて図々しいのは百も承知です！だけど、だけど、妹が、妹がまだっ！」

月夜の晩に戦う覚悟を決めた男が一人。力を持たず、勇気を持たず、魔剣を持った男が一人。彼は戦う。誰が為に何の為に。月夜の下で魔王の影が　いま、墮ちた。

第3話・月夜の森で、御用心!?(2)

夜の森。

静かに寝静まる月夜の森。ホー ホーとフクロウが鳴き、オオーンと
オオカミが雄叫びをあげる。

「オオオオーン!」

だが、今あがつたこの雄叫びはただのオオカミの鳴き声だらうか?

「はあ……はあ……んくつ……はあ……はあ……」

ここに1人の小さな少女がいる。暗く険しく進み辛い森を一心不乱
にと走り抜けているその少女、名前をルチアという。ルチアはこの
近隣の小さな村に住む娘である。母親は早くに他界したが、父親と
姉と3人でほそぼそと幸せに暮らしていた。

だが、そんなある日。父親が得体の知れない病魔に冒されてしまつ。
何日も何日も高い熱が出て、うなされていた父親。このままで、
愛しい父親まで自分たちのもとから去つていつてしまつ。ルチアは

苦しそうに呻きを上げる父親の看病をしながら1人涙を流していた。そんなある日。ルチアは村の村長から月夜に光る月見草という薬草の話を聞く。なんでも、それは魔力の集まるリーグスの森にしか生えていなく。月夜の晩にしか見つける事が出来ないらしい。しかし、それを煎じて飲めばたちまちにどんな病魔に冒された病人だろうと1日で良くなるという代物らしいのだ。

それを聞いたルチアは直ぐに姉であるシネアに話をした。そして夜中を待ち、ルチアとシネアはリーグスの森に月見草を取りに入ったのだった。

月見草は直ぐに見つかった。月明かりに光るという話通りに光っていたため持ってきた袋いっぱいに集める事が出来た。だが、そこでルチアたちは思わず者と出くわしてしまつ。

モンスター。

しかし、モンスターと言つても魔術師たちが連れる使い魔などから知られる通り、人間に友好的で、乱暴な者も中には居るには居るのだが、ほとんどの者は優しい者たちばかりなのだ。だから、普通は怒らせたりしない限り人間を襲うことはしないはずの者たちなのである。そう、普通ならば…。

もちろん、ルチアもシネアもその現れたモンスターには一切危害は加えてはいない。むしろ、途中で一休みする為に家から持つてきた幾つかのパンを分けてあげようと言えました。

だが、彼らはそんな2人に突然襲い掛かってきた。当然、2人は何

が何だか分からぬ。何故、人間に友好的なモンスターたちが自分たちを襲うのか。自分たちは彼らを怒らせるような事はしなかつたはず。なのに…

モンスターたちは容赦なくルチアとシネアに襲い掛かつてくる。2人は逃げた。訳も分からず、一心不乱に森をかけずり逃げた。途中、足を痛めたシネアを庇い、ルチアは自分の体をモンスターたちの目の前に晒し廻となり姉と別れ走った。モンスターたちは思惑通り自分が追い掛けてきた。

「グルルルアア、どこへ行こうというのだ。幼き娘よ、グルルル、諦めて我に食われよ…」

と、ルチアがこの不運な出来事の発端を思い返していると、後ろから追い掛てくる2メートルは越そう大男が大きな声でルチアに話しかけてきた。だが、それは人では無い。紫色の毛皮に黄色い瞳。禍々しいまでの赤い牙に爪。その顔はオオカミそのもの。それはウルフマンと呼ばれるモンスターである。

ウルフマンはゆっくりと森の中を歩いていく。

「グルルルア、いくら逃げても森のハンターであるオオカミに人間が勝てるはずが無いであろう。我と貴様が行く道は一緒。だが、歩み方が違う。貴様が荒れた道に、突出した枝木に気を取られている間、私はそれ全般を避け、前へと最短距離を進む。グル、だから…」

「うー？そ、そんな……」

夜の森を必死に走るルチアはその足を止める。目の前の光景に驚き、落胆し、恐怖し、足を止めてしまう。少なくとも100メートルは離していたと思う。

姉の代わりに自分が囮になるとウルフマンの前に出て、逃げ走り出した時、少なくとも100メートルは離れていたはずなのに。ルチアは信じられないといった表情でその日の前の者を見る。

「どうして……歩いて……歩いていたはず……」

「グルアラララ、言つたであらう？我はオオカミ、貴様は人間。所詮、人間がいくら走るうとも足で我に勝てるはずがない」

ウルフマンである。ルチアの遠く後ろをゆっくりと歩いて追い掛けていたはずのウルフマン。しかし、いつの間にかウルフマンはルチアの目の前までに近づいてきていた。

と、その信じられない光景に驚いていたルチアの体が、ぐわっと宙に上がる。ウルフマンに首を掴まれたのだ。2メートルはあるウルフマンの体、その腕に小さなルチアは軽々と捕まえられ宙へと上げ

られたのだ。ぎりぎりっとウルフマンが腕に力を入れる。同時にルチアの首が締まり、彼女は息を詰まらせる。

「…げほつ…だれ…か…」

絞る様に出した声はかすれ、森の淀みに消えていく。グルルルとウルフマンが顔をにやつかせ、ルチアの首を締める腕に力を入れていく。誰か、誰か助けて。ルチアは切なさと虚しさと絶望に心を支配されていく。

（もう…ダメ。息が出来ない…お姉ちゃん…逃げきれ、たかな？私が死んでも、お姉ちゃんが生きていてくれるなら…）

少女は薄れ行く意識の中、姉への思いを神に祈った。

（神さま、お願ひです。私はここで死んでもいい。だから、だから、お姉ちゃんだけは無事に…無事にお家に帰してあげて…私は…）

もう苦しさと涙で前が見えない。歪んだ世界は揺れて、夜の空に浮かび上がる月も揺れて見える。少女は諦めた。姉が助かれれば、自分の命はいらないと…。

ドスツ

途端、不思議な感覚が少女を襲つ。苦しさと涙で揺れていた世界が急に消えた。目の前数センチにあつたはずのウルフマンの顔が夜空へと上がっていく。いや、違う。落ちている。ウルフマンの巨大な腕によつて首を掴まれ宙に上げられていた自分の体が、地面に着地したのだ。

な、に?と苦しみから解放された少女ルチアは辺りを見回す。

「我の… 我の腕がああああつ!?

ウルフマンは叫びをあげ、無くなつた右腕を押さえる。無くなつた?そこでルチアは自分と同じく地面に落ちているウルフマンの腕を見つける。一体、何が起きたのだろうか?ルチアは未だ起きた出来事に理解が出来ない。

と、ルチアが目の前の光景に呆然としていると1人の男が現れる。

「……だ、れ？」

ルチアはその男の姿に息を飲む。

漆黒の男。黒髪と黒い瞳、その男が持つ剣も黒く、その肌だけが白く映えて輝いている。闇に溶け込んだその姿は妖艶で、光を放つその姿は美しかった。

(天使さま?)

男はチロリとルチアの方を見る。その瞳にドキリとルチアは胸を高める。と、男はルチアから視線をウルフマンの方に向け、そのままウルフマンに近付いていく。

「ルルルツ、貴様…何者だ？我的腕を、我の腕を切るなど…我は恐れ多くも狼人族の最強の魔王・ケルフ＝ウルファ＝ウルファリオなるぞ！？人間如きがそんな我の…」

ウルフマンがその鋭い牙を露にして怒号を上げる。

その低く重く大きな声でルチアの体をビクンと強張らせる。恐ろしいウルフマンの怒号。背筋が凍るような、ウルフマンの鋭い視線。ルチアは思った。駄目だ。いけない。勝てない。いくら、硬い体のウルフマンの腕を切り落としたとしても。正面から挑んだとしたら、いくら強者の王宮師団の衛士としても。この見したこともない凶悪なモンスターに勝てるはずが…。

そして、次の瞬間。

少女はその信じられない光景に息を飲む。

巨大で筋肉の塊で、おおよそ剣なんかでは傷一つ付けられそうにないウルフマンの体。だが、少女は見た。たつた一振り。たつた一振りの剣筋にてその頑丈なウルフマンの体が切り伏せられた様を。どうしあつとその場に重く力無く倒れ込むウルフマン。終わつた。のどううか？ルチアは言い様ない心の高揚に駆られる。

貴方は誰？貴方は何者？貴方は天から使わされた天使さまなの？少女ルチアはぼーっとその黒い天使を見詰める。どきどきと心が静かな森にてうるさくわめき声をあげる。

「ルチア？ルチア！ああ、ルチア、私の妹。無事だったのね。良かつた、良かつた…」

と、ルチアが目の前の男に気を取られている。すぐ隣には自分の姉。姉は自分に抱きつき、ひたすらに良かつた、良かつたと呟く。そして、次にウルフマンをたつた一振りで倒した黒の男に振り向く。

「ああ、名も知らぬ旅のお方。ありがとうございます、ありがとうございます。あなたは私たち姉妹の命の恩人です」

男は黙つたままだ。その手に持つ剣を持っていた布地に巻き上げ、沈黙を保つ。

「あの、旅人さま。ここより暫く行くと、私たちの村があります。もし…もし、よろしかつたら、お礼も兼ねて一晩の宿をお世話をさせて頂きたいのですが…」

と、姉シネアのその言葉に男はよつよつく顔をこじりに向ける。

「ああ、頼むよ…」

と、少し気分の優れないような顔で笑顔を作った。

：：：

イシスの村は、王都・アースラルから西方面に数十キロメートルばかり進んだ場所に位置している。イシスの村の役目は森で採れる森の恵み、木材や動物の肉、木の実などなどを王都へと供給すること。いわば、自然を活かした農場のようなもの。そして、こういった農村は国にいくつもあってそれぞれがそれぞれ、色んな材料や食材を王都へと運んでいる。

だが、農村といつても村は村。そこに人が住み、そこで商いを行い、生きていく者もいる訳である。まあ、その中で先にいったように農村としての役目を担う者がほとんどで、ここはそんな森を生業とする木こりと狩人の多い村であった。

「なあ、魔剣…」

「なんだ主よ?」

そんな木こりや狩人多き農村の中の一軒の家。そして、その一階の部屋で狼のモンスターから2人の少女を助け、宿をお世話されるとになった男が自分の手の中にある魔剣に話しかけた。

「あれはどうことだ?」

「あれとは?」

魔剣は主人の酷く曖昧な言葉に疑問符を投げかける。と、それに怒りを覚えた主人ヒイロは魔剣アイゼルに怒鳴り声をあげる。

「さつきモンスターと戦った時だ!?」

さつきモンスターと戦った時。アイゼルはふとその戦った時の事を思い浮かべる。が、なぜ主人がこれほど怒っているのか分からぬ。

「分からぬじやねえ！どうしたことだ？お前、魔法を使った時！モンスターを切り倒した時！俺がなんて言つた！？俺はいつも自分の事を呼ぶ時は『俺』って言つんだよ！なのに、なのに、魔法を使つた辺りから俺の意識が変に薄らいで……ついには自分を自分で『我』なんて言つちまつたんだぞ？お前、あれ、なんなんだよ！？」

興奮しているのかいまいち上手く言葉が出てこないヒイロ。だが、そんなつたないヒイロの言葉であつたがアイゼルは理解したらしく。ふう、と一つため息を吐き話始める。

「主よ、つまり。我を使った辺りから自分の意にならぬ言動や行動が思わしくないのだな？」

ああ、そうだ。ヒイロはアイゼルに向かい鋭い視線を『』える。

ヒイロは困惑していた。モンスターと戦つたとき、魔法を使つたとき。自分の体が勝手に動き出したことに、自分の思ったこととは別の言葉が出たことに。口調までもいつもの自分とは違つていた。『我』などと、まるで、さう。この手に握られる魔剣の口調のようだ。

「お前、もしかして、力を貸すなんて調子のこじと並んで俺の体を乗つとる気じゃないだうな？」

遺跡では、考える暇などなかつたため勢いでこの魔剣アイゼルを封印から解き放ち、契約などを交わした。だが、よくよく考えれば話しがうま過ぎではないだらうか？ヒイロはアイゼルを睨み付けたまま、ぐつと考えを張り巡らせる。

世界を支配出来ると豪語する魔剣。見返りは望まないと契約したときはつきりとこの魔剣は言つた。だが、それは本当なのだろうか？もし、この魔剣が悪どい悪魔などのようなものだとしたら？上手い口車に乗せられ、一時の甘い誘惑に乗せられ、気付いたときにはその罠にはめられて体を乗つとられてしまつのは？

「ふう、主よ。安心するが良い。そのような事は有りはしない。我が主の体を乗つとるなどと……」

「なら、あれは！？言つとくけど、俺は剣術なんて使つたことねえんだよ！それが急に体が浮くようにモンスターを斬つて…。言葉だつて、お前みたいに『我』なんて。どう考えたつておかしいだろう！？」

すると、アイゼルは再びため息を付く。静かに語り始める。

「最初に言つておるべきだったな。確かに、主よ。我を使つことで主の体に向らかの変異が起つることは事実だ」

やつぱり、ヒイロはアイゼルを投げ捨てようとする。

「まあ、また主よ。それは致し方の無いことなのだ。得る力には代価が付きもの。魔剣である我ならば尚更であろうつ。」

「だからって、お前に体を提供するなんて一言も言つてない！」

「だから、違つと言つていい。私は主の体を乗つとるつもりも力もない。ただ、我を使うことで主には……その……我的力を通して世に流れる陰の氣を取り込むこととなるのだ」

ヒイロはその言葉に頭を傾げる。確かに陰陽道などでは陰と陽なる陰の氣？

ヒイロはその言葉に頭を傾げる。確かに陰陽道などでは陰と陽なる

区切りがあるが。ヒイロはそれほど詳しくない陰陽道を考える。陰と陽。つまり、悪と善みたいな感じだろうか？

「つ？までよ、じゃあなたにか？俺はお前を使つゝとこ悪い染まるつてわけか？」

「いや、こりなれば魔に近い存在になるとぬづべきだりつな

ふざり…ふざけるなー」と、ヒイロは結局アイゼルを部屋のすみへと投げ飛ばす。魔に近い存在？それは、つまりモンスターになるということなのだろう。つまり、使い続ければ自分は…

「いたたた、主よ。心配するな。確かに使い続ければ主は魔に近い存在になる。が、力を抑えればそんなことにはなりはしない」

「抑えねばって…。ほん、誰がお前なんかまた使おうなんて思うつか…」

「しかし、それでは力の無い主はこの世界では生きて行けないだろうに？力が無ければ、元の世界にも帰れないのではないか？」

ぐつ、ヒイロはアイゼルのその言葉に団星を突かれてしまう。ポンと久しぶりのベッドに仰向けに寝転がるヒイロ。彼は天井を見つめ、暫し、物思いに耽いつてしまう。

ああ、なんということか。手にした力は強大で巨大なリスクを背負うもの。しかも、元の世界に帰るにはコイツが無ければ困ってしまう。外せない呪われた武器。と、目を瞑り、眠りに入ったヒイロの頭に某有名冒険ゲームの『この武器は呪われている。外せない』という言葉と音楽が流れたのであった。

第4話・月夜の森で、御用心ー? (3)

「どうしてー?」

赤い髪の少女ルチアは、叫びをあげる。

「…………っはあ……っはあ……」

彼女の目の前には、顔を苦しそうに歪め、息を荒立てて寝ている父親がいた。

治らなかつた。

ルチアはその驚愕の事実に怒りにも似た悲しみに叫びをあげたのだ。月見草。それを煎じて飲めば、どんな病魔に苦しむ病人だろうと1日で回復する。ルチアは村長にそう聞き、昨日の夜、月見草を姉のシネアとリーグスの森へと採りにいった。途中、凶悪化したモンスターと出会い命を落としそうにもなつた。その時、助けてくれた黒色の天使は一階でまだ眠っているが。問題は、そつまでして手に入れた月見草だというのに、一晩経つた今日、いまだ父親は病魔に苦しみの声をあげているのだ。時間がまだ足りないのか?とも思つ

た。だが、それにしたって前よりも父親が苦しそうにしているのはどういう事か？ルチアは、月見草を煎じて作った飲み薬を床へと叩きつける。バキッと木で作られた器が叩きつけられた衝撃で割れた。

「うううう…どうして？お姉ちゃん、私たち言われた通りにしたよね？月夜に光る月見草を探つて、それを煎じてお薬を作ったのよ？なのに…なのに…」

「ルチア……。どうしてなの！？神さま、どうして、私たちをこうも嫌つてしまわれるの！？私たちが、ルチアがこんなにも一生懸命に…」

ルチアの涙に、隣にいる姉シネアも涙を流す。なぜ？なぜ、神さまは自分たちをここまで嫌うのか…と。

「どうしたんだ？」

と、そこへ一人の男が騒ぎを聞き付けて部屋に入つてくる。ルチアいわく黒色の天使ヒイロである。ヒイロは朝方から泣き叫ぶ2人の少女たちを見て困惑の視線を送る。その手には黒色の魔剣アイゼルが携えてあつた。

「す、すみません、ヒイロわよ。お見苦しこじいわをお見せしますね…」
た。ちよ、朝食をいまお出しますね…」

そう言いシネアは部屋から飛び出し、キッチンの方へと走っていく。
そんな彼女の頬に涙がこぼれていたのをヒイロは見てしまった。

「……なあ、なんで君たちは泣いて……！？……」

ヒ、ヒイロが部屋に残つた赤髪の少女ルチアに話しかけようとした
とき。ヒイロはその部屋のベッドで苦ししそうにうめき声をあげる1
人の男に気がつく。

「私たちの……お父さんです。1週間ぐらい前から、熱や胸の痛み
に苦しみ出して」

ルチアは床に落とした丹参草の煎じ薬と割れた器を直しながらヒイ
ロに話をする。

「丹参草って言つて、煎じてお薬にすればたちまちに病気が良くな

るって聞いたんです。それは月夜の夜に光るらしくて。昨日、私たちが森にいたのはこれを探るためなんです」

なるほど。だから、あんな夜遅くに森の中に居たのかヒロは昨夜の事を思い出させる。

「でも、駄目でした。あはは、お父さんの病気。丹参草のお薬でも治つませんでした」

セツコ、ぽろぽろと赤く小さな瞳からルチアは涙を流す。

「神さまは、きっと私たちが嫌いなんです。去年、お母さんが病気でなくなつたときも神さまを恨みました。なんで、どうしてって…。今度はお父さんです。なんでなんでしょう?どうしてなんでしょう?私、神さまに嫌われるようなことしました?ねえ…私、したんですか!?」

「…?」

ヒイロはビクッと体を強張らせる。なぜなら、ルチアがヒイロのお腹辺りの服をぎゅっと掴み、下から訴えるような瞳で叫んできたからだ。ぽろぽろ、ぽろぽろとその小さくつぶらな瞳から涙を流すルチア。赤い瞳がより一層赤く染め上がっている。

なぜ、彼女は自分に訴えるような瞳で叫んでくるのかヒイロには分からなかつた。いや、ルチアでさえ分からなかつたであろう。ただ、理由を付けるならば。昨夜、ヒイロの戦う姿に天使をみたルチアがヒイロに訴えずには居られなかつたのだろう。天使とは、天に使える者。つまり、神の下僕ということなのだから。

「すみ、ませんでした。いきなり、叫んだりしてしまって。ヒイロさまには関係のことなのに…」

ルチアがヒイロの服を掴んだまま涙を流して、一時が過ぎた。^{じつとき} いまだ困惑中のヒイロは、少女の涙を拭つてあげるのが男か、そのまま何も言わず黙つて抱き締めるのが男か、などと訳の分からぬことを考えていた。と、ルチアは掴んでいた手を離し、再び父親の眠るベッドの横に座つてしまつ。

「（主、主よー。）」

ヒイロがルチアから解放され、残念のよくなほつとしたような複雑な心境でいると手に携えていた魔剣アイゼルが小声で自分に話しかけてきた。

ちなみに、なぜ小声かといふと。

今朝、ヒイロが起きたときに『この世界では剣が言葉を話すのは普通なのか?』と聞いたときアイゼルが『そんか訳ないでしょ、うに、主』と少しヒイロを小馬鹿にしたような口振りで言つてきたので『じゃあ、人前では喋るな! 得体の知れない奴だと思われたくないからな。でも、どうしてもつてときは小声で喋れ。あと、次に俺を小馬鹿にしたらへし折る…』といつ一連の動作があつたからだ。

「(なんだよ?)」

そんな訳でヒイロも小声でアイゼルに返事を返す。と、アイゼルから驚きの事実をヒイロは聞かされる。

「(月見草では、病気は治らないぞ。確かに、飲めばどんな病気も1日で治るという秘薬中の秘薬が存在することは事実だ。そして、月見草はその秘薬の中に入る材料として使われる。つまり、単体では意味をなさない)」

ヒイロは、アイゼルの言葉に苦しむ父親を必死に看病するルチアに

視線を向ける。と、せりてアイゼルから驚きの言葉が飛び出す。

「（それから、主よ。どうやら、あの娘の父親。病気では無いと思われるぞ？）」

はっ？ 病気じゃない？ お前は何を言っているんだ？ とヒイロは手に持つアイゼルを凝視する。が、アイゼルは構わず話を続ける。

「（あれば、なんらかの呪いの一種。我から見れば、あの男にまとうり付く呪の影がありありと見て取れるぞ？）」

マジなのか？ ヒイロは再び、父親を看病するルチアに視線を向け。次に苦しそうに寝ている父親に視線を向ける。

なんという事だ。呪い？ 病気のほうが、まだ遙かに助かる見込みが高かつた。だが、呪い。誰が何の為に、なぜこの少女たちの父親に呪いをかけたのかヒイロには分からなかつた。だが、事実としてこの父親にかかる呪いは見て取れるとアイゼルが言つ。

必死に看病するルチア。彼女を見ていると、その驚愕の事実にヒイ

口は脳を剥き裂かれる思いに翻弄された。

「（どうか、どうにかなりないのかよ？）」

ヒイロはアイゼルに呪いを解く方法はないのか、と詰め寄る。すると、アイゼルは暫く考えて

「（たぶん、この村には呪いを解く強力な魔術師はないであろう。そうなると……主がそれをやることになるが？）」

俺が何をやるって？ヒイロはアイゼルの言葉にこまごま理解を示さない。

「（つまり、主が再び我を使い。魔法を使うという訳だ。だが、主は我を使つことに抵抗があるのだろう？……となるとやはりこの父親は見殺しに……）」

ヒイロはその言葉を聞き、アイゼルをへし折りたくなる衝動に駆ら

れる。が、自分ならルチアの父親を助けることが出来るといつも葉に心を揺るがせていた。

魔剣アイゼルを使えば、使うほどに自分は悪または魔に近い存在へと染まっていく。出来れば、そんなことは少しでもしたくはない。自分は真っ当な人間として、元いた世界に帰りたいのだ。だから、もし使い続けてその体も心もモンスターのようになってしまふとしたら。それは嫌だ。

ヒイロは魔剣アイゼルをぼーっと見ながら考える。

一度だけなら。

まだ、数回しかアイゼルを使っていないから。ちょっとだけなら無いのも同じ。いや、だが、その一度が命取りになるかもしれない。ヒイロは堂々と巡る考えに頭を悩ませる。ふと、ヒイロは元いた世界の事を思い出す。馬鹿な正義を行つて自分が逆に不幸になった事を思い出した。そうだよ、余計なんだ。正義をした所で、結果何にもならない。裏切られる。だから俺は……。

「（……どうすればいい？）」

「（何がだ、主？）」

「（ルチアの父親の呪いを解くためにだよ！俺はまずなにをしたらいい？寿命でもお前に捧げるか？）」

だけど、ここにいるルチアは助けたい。必死に父親の看病をするルチア。神さまに嫌われているの？と聞いてきたルチア。あの可愛らしい小さな小さな瞳から涙を流し、訴えてきたルチア。助けたい。余計なこととか裏切られる正義とか、どうでもいい。

ただ、必死に父親を看病する少女を見てヒイロは助けたいと思った。だから、たとえ自分が馬鹿を見たとしても。魔剣を使い続けてモンスターになってしまったとしても。ヒイロは思った。ルチアは自分に似ている。不幸を呼ぶ自分の体質。彼女が自分のように不幸を呼ぶ体質なのが知らない。だが、現にいま彼女は不幸だ。ただ、それでも彼女は父親を必死に看病していた。だから…

「（良い覚悟だ、主よ）」

魔剣アイゼルはさつ砾くと次にヒイロに父親の側まで行くよつ告げ
る。

「あの、ヒイロさま。」

ルチアは急に父親の眠るベッドに黒色の剣をがざしたヒイロに驚きの声をあげる。だが、ヒイロは黙つたままじいと父親の真上の空間を見てくる。

「（それで、あとはビリあるんだ？）」

そして、再び小声でアイゼルに話をかける。

「（うむ。いまから呪い返しの術をかける）」

呪い返しの術？

ヒイロは聞いたことない魔法の名前を繰り返す。そして、呪い返しねえ、とヒイロはある疑問を抱く。

「（なあ、それってもしかして失敗したら俺に呪いが来るとか？）」

「（よくわかつたな、主？本当だつたら呪いを解くのに用いる魔法は陽の術で呪いを浄化して治すという魔法が通常なのだが。我は魔剣、陰の術のほうが得意。したがつて陰の術である、呪いを相手に返す、または、何処かへと消え失せさせる術を用いるのだ。ちなみに失敗すると術者にもその呪いがかかる。……やはり、止めておくか、主？）」

失敗すれば、俺もあの世行き？ヒイロは決意したはずの心を少し揺るがせる。やつぱり、止めておこうか…

「ヒイロさま、どうしたんですか？」

と、少し臆病になっていたヒイロにルチアが心配そうな瞳で見詰めてきた。自分もそれどころではないはずだろうに。少女は他人の心配をしてきたのだ。

「ははっ…」

そんなルチアの顔を見てヒイロは迷わず、呪い返しの呪文を唱えた

のであった。

：：：：：

「があーはっはっはっはっはっー！」

イシスの村の一軒の家に男の豪快な笑い声が木靈する。

「いや、旦那は俺たち家族の命の恩人であー・シネアやルチアを得
体の知れないモンスターから救つて下さつて。さらには得体の知れ
ない病魔に冒された俺まで救つて頂いちまつて、があーはっはっは

「はははははははー！曰那あ、あんたは今日から俺たちの家族だ！さあ、遠慮しないで酒や飯をたんと呑し上がってくれーい！があーはははははははははははははーー！」

体の大きな男はバンバンと隣に座るヒイロの背中を叩くと「機嫌そ
うに豪快な笑いをあげ、その手に持つ酒をグビグビとやはり豪快に
飲み干していく。

「もう、お父さんったら。病み上がりなんですから、お酒は控えめにね！」

と、料理をキツチンから運ぶ緑色の髪をした見た目20代前半の女性が愉快に笑う父親に注意を促す。

「がはははは、細かい」とは気にするな、シネアよ!といふか、病氣で1週間も酒を飲めなかつたからなあ!そつちの方が体に悪いつてえもんだあ!なあ、旦那あ?がははははーつ!」

シネアにお父さんと呼ばれた男はヒイロにそう言ひ、再び酒を飲み

始める。

「 もう、ヒイロさまに失礼なことをしないでお父さん！」

と、今度は男とは反対方向のヒイロの隣に座る見た目13～4歳の赤い髪色をした少女がヒイロの腕を取り、父親から離さうと自分の方へと引っ張る。

「 があーはーはーつ！ ルチアは旦那がいたくお気に入りのようだなあーつ？ わつはつはつはつはつーどうだろ、旦那？ ルチアはまだ幼くて成りはこんなんだが、母さんにそっくりで将来は美人になること請け合いだ！ 嫁さんに貰つてやつてはくれねえかあ？」

「 や、やだ、お父さんつたら、馬鹿あーヒイロさま、気にしないで、気にしないで下をこね？ お父さんつたら、酔つ払つちやつて……でもでも……もし……ヒイロさまが良かつたら……あつーうーうふ、なんでも……なんでもないです、あははは……」

ルチアは顔を赤らめて、ブンブンと両手を横に振る。そしてそれを見た、父親の男が『どうだい、なんなら姉のシネアも一緒に…』な

んて言うもんだから父親の男はルチアのパンチヒシネアのお盆攻撃に暫し悶えることとなつた。

さて、どこから説明した方が良いのだろうか。結論から言つと、まづ、ヒイロの呪い返しの術は成功した。みるみる内に顔色が良くなつていくルチアたちの父親はその日の夕方には豪快な笑い声をあげながら、ルチアとシネアを抱き上げる勢いであつた。

キッキンに居て事の要領がよく分からないシネアは何がなんだか分からず感極まり泣き出し、ルチアはヒイロの奇跡とも見えた魔法に、やはり天使さまなんだとひたすらにヒイロの胸の中でお礼の言葉を泣きながら告げていた。

それから父親は、ことの経緯をルチアから聞き。ヒイロに熱くデカイ抱擁で感謝の意を表し。そして、その日の夜。つまり、いま現在だが。病気が治った事とヒイロという恩人を歓迎するために、こんな宴を開いたという訳なのだ。

「…ヒイロさま？」

と、ヒイロがこの宴の始まりを思い起こしてぼーっとしているルチアがヒイロに話しかけてきた。どうやら、ぼーっとし過ぎたようだ時間がだいぶ経過していたようだ。料理は父親がほとんど平らげたらしく皿にはその少ない残りカスしか残っていない。

「ヒイロさま…」

と、ヒイロがテーブルに並んでいた料理の数々の成れの果てを見て
いるとい、ルチアが潤んだ瞳でヒイロを見詰めてきた。

「ヒイロさまは何者なんですか？なぜ、旅人なのに、あんな王宮を
歩くH宮歸団の衛士のような力を持つておられるのですか？」

ぐつたりとヒイロに身を任せてくれるルチア。熱を帯びたルチアの唇
がヒイロに近づいてくる。

「つー？ル、ルチア！？もしかして、酔ってる？」

「酔つてませんーお酒なんて子どもが飲んだらいけないんですね…」

と、グイグイとヒイロを自分の顔へと近付けようとするルチア。

「ちよつ、親父さん？シネア？誰か！？」

ヒイロは必死に近くにいる誰かに助けを求める。が、シネアは次の料理を作っているのか先ほどキッチンに行つたまま一向に帰つて来ない。ならば、父親が、とヒイロが必死に目だけ父親の方向を見ると…

「あつー？……あつ、あ～……ぐう～……」

なんて目がバツチリ合つたにも関わらずいきなり寝たふりをし始めた。「イツ、もしかして、既成事実を作らせようとしてる？とヒイロが寝たふりをしている父親に怒りを覚えた瞬間。

ふにつ

という柔らかい感触がヒイロの頬に伝わる。うえつ？とヒイロがそちらの方を見るとルチアの唇が自分の頬に当たつているのが確認出来た。うえつ！？とヒイロがその出来事に驚いていたルチアは次第に唇をヒイロの唇に持つていこうと彼の頭をググッと引き寄せ

た。

(ぐわわっ、まずい。まずいつて、いくらなんでも、幼女に手を出
すなんて…)

と、ヒイロが必死にルチアの暴走に抵抗をしてくると…

「（……おひ、おおー？よし行け、それ行け！那を！」の物にする
んだルチア！）」

と、父親が小声でルチアの応援をしていた。

(この馬鹿親父めが一つ一つて、わわわ？まずい、もう、ルチアの
唇が俺の唇にい～つ！？)

もはや、ルチアの小さく吐く息がヒイロの吸う口元まで近づいてい
た。生暖かなルチアの吐息。やはり、お酒を飲んでいるらしく。少
し、アルコールの匂いがヒイロの口の中に広がる。そして、遂に、遂に、
ルチアの唇がヒイロの唇に…

「ぐう……」

命わざらなかつた。ルチアは寝てしまつたのだ。あともう少しどヒイロの脣までという所でルチアは睡魔に勝てず、ヒイロの頬に再びキスするような形で眠りこけてしまつた。

「たす、たすたす、助かつた……」

ヒイロは、それに安堵のため息をつく。嫌ではない。むしろ、嬉しい。産まれてこのかた、こんなにも女の子に迫られたことが合つただろうか？それを考へると少し残念な気持ちに駆られるが、しかし、相手はまだ1~3~1~4の子ども。それに……

「田那あ、困りますぜ？せつかく、俺がルチアのコップに酒を混ぜてやつたのに。そのまま、ぶちゅっとやつぱつとやつれて良かつたの……」

この馬鹿親父に仕組まれた事にそつ湯々とはまりたく無かつたのだ。

だいたい、お酒の勢いでなどと…。

ヒイロはすう、すうと自分の胸元で眠りにつく少女を見て、天井を見上げる。

（余計なことも、時には必要だよな？裏切られたって、正義は見返りを求めてするもんじゃない。無償の行い。助けたいから、助けるんだ…）

ヒイロはルチアの姿を見て、にっこりと笑う。この娘のお蔭で今まで抱えてきた自分のトラウマから解放された。本当に呪いを解いたのはこのルチアで、解いて貰ったのは自分なのだ、と。ヒイロは、自分の胸元で小さな寝息をたてて眠るルチアの頭をそっと優しく優しく撫でてあげたのであった。

第5話・構成す出逢い、御用心！？

歓迎の宴から、夜が明けた。朝日がまぶしい。ヒイロは赤壁根の家の外でうつーっと背を伸ばす。

「どうしても、行ってしまわれるのですか？」

と、ルチアがそんなヒイロの胸にギュッと抱き付き、訴える。

「まだ、行かないで下さい。まだ、私、ヒイロをまだ恩返しをしてない。お礼をしてない」

『おもづかずつと小さな体と小さな腕で必死にヒイロの体を引き止めようと抱き締めてくるルチア。

「ほらほら、ルチア。旦那にも事情つてもんがあるんだ。無理を言つて止めちゃなんねえ」

と、ルチアの父親が馬に荷車を繋げた運搬馬車を牽きながらルチアにそう注意する。

「ましてや、旦那は旅人だ。止められねえ。果てなき夢と好奇心を持つた男はどうまでも止まらねえのさ」

「ひー…ぐすっ…」

ルチアはヒイロの胸元に顔を埋めながら、泣き声をあげる。

「ヒイロさま、これお弁当です。王都に行く道中でお食べトモー

そい言いシネアがやや大きめの袋をヒイロに渡す。

「さあて、旦那、準備はいいですかい？別れは惜しいが、止まっちゃならぬえ。いざ会える楽しみが無くなっちゃまうからなあ。ルチ

アもシネアも涙を流して、見送つてやるんだあ。なあに、旦那は旅人。いずれまた、このイシスの村に戻つてくれるだ

「アハ！」
そう言い、父親はルチアとシネアの肩に手を置くとこりとヒィ口に笑いかける。

「そりだらう、旦那？だつて、旦那は俺たち家族の大事な大事なもう1人の家族なんだからなあ！？」このガロウベル＝オルフォンベルトは娘、シネア＝オルフォンベルトとルチア＝オルフォンベルトとの3人でいつまでも待つてゐるぜ！ここはあんたの第2の故郷。いつも好きな時に帰つてきな！よし、じゃあ、フランク。俺の代わりに旦那を無事に王都まで送り届けてくれよな？」

「ああ、任せとけ、ガロウベル！俺は毎週、王都に森で取れた木材を運んでるんだぜ？今日も同じさ。よおし、じゃ、行くとしますか！旅人の旦那、しつかり捕まつてなよ？なんせ、速運びのフランクとは俺のことだぜえい！！」

こうして、ヒイロは約二日間お世話になつたルチアたちの家を後にする。目指すはイシスの村から東を数十キロ行つた王都アースラル。なぜ、急にヒイロが王都アースラルに行くことになったのか。それは、昨夜の宴が終わり、眠りに付こうとヒイロがベッドに潜つたと

きにアイゼルが言った言葉にあった。

『主よ、いつまでもこの村で過ごしている訳にはいかないぞ。主は旅人。元の世界に帰るために旅を続けているのであろう？ルチアという小娘に言い寄られていい気になつてているのはいいが、目的を忘れてはいかん。まあ、ここが主の旅の最終到着地点ならば話しづ別だが？』

その時は、言われなくとも分かっているヒイロはアイゼルを投げ放つた。だが、確かにアイゼルの言つ通り自分は元の世界に帰るという目的を忘れていた。

たった数日の出来事だというのに、ヒイロはルチアたちのいる家に自分の居場所を作ってしまったのだ。だが、これもアイゼルの言う通りでここが自分の最終到着地点ではない。だから、ヒイロは夜が明けた朝方にルチアたちの父親のガロウベルにここを旅立つ話しをした。すると、ガロウベルは少し残念そうな顔をし、その後、にっこりと笑い。

『わかった。旦那は旅人だものな。旅をするのが当たり前。よし、俺の知り合いに王都に木材を届けに行く奴がいるんだ。まだ、準備している最中だと思うから話をつけてくる』

と、材木運び屋のフランクに朝一番に話をつけて行き、今に至ると

いつ訳なのである。ヒイロはバタバタバタバタと森を凄い勢いで走る馬車の荷台でもはや見えなくなつたイシスの村の方向を見る。また、また帰つてくるから。いや、元の世界に帰る方法を見つけたら。その前に立ち寄るから、と胸に込み上げた思いを奥歯で噛み締めて物凄い勢いで走る馬車の荷台に揺られる。

(と、いつか。これじゃ、シネアに貰つた弁当は食えねえな……)

：：：：：

王都アースラルは、実に見事な街並みだと思つ。ヒイロは街の入り口で呆然と立ち尽くし、そんな事を考えてしまう。

アメリカのニューヨークや日本の東京みたいに幾つもの大きなビルが建ち並ぶ街並みも、それはそれで凄い物だと思うが、この石レンガや木材、その他諸々で作られた歴史感漂う家々が建ち並ぶアーチャルの街も凄いと思う。まるで、中世のヨーロッパ並みの外見。

街は上空から見て丸く円形状に街並みを作り、外側は庶民が住む街なのか木材などで作られた家々、そして、中に入つて行くに連れて石やレンガで作られた裕福層の家が建ち並ぶ。更に、進めば誰が住んでいるのか石やレンガ、木材と全てを惜し気もなくふんだんに使つた豪華な屋敷が建ち並んでいた。

「そいじゃ、旅人の旦那。確かに王都アースラルまでお届けしやしたぜい？俺は木材を材木屋で卸して、またイシスに戻るとなります。また、お会いしましょ」

それじゃ、と手を振るフランクにヒイロはありがとうお礼の返事を言う。

そして、再び王都アースラルに見入つてしまつ。古い建築様式で造られた街並み、まるで小説かゲームにでも出てきそうな中世時代の西洋な街並み。そして、その中心には山の様に高い丘と真っ白な王宮がそびえ立つていた。その真っ白なお城は屋根が空の雲にまで突き抜け、街の何処に居ようと見えてしまうほど大きかった。

（ゲームのお城だつて、もうちょっと控えめだつて…）

ヒイロは見た事のない世界に初めて感動といつ感情を蘇生えさせてしまう。今までテレビやゲームなどでしか見たことの無かつた世界。それがまさにそこにあるたのだ。

「………… わたし…… と……」

と、ようやく街の外観に圧倒されていた心を落ち着かせるとヒイロは今後の事を考え始めた。

（王都、か…。王都つていうくらいだから、この世界の中心つてことでいいんだよな？）

とりあえず、ヒイロはレンガで舗装された街の通りを歩く。街中を散策がてら、自分が元の世界に戻るためにはどうしたら良いのか考えようと思つたのだ。王都と呼ばれるくらいだから、それ相応の力を持つ者やそれなりの情報があるやもとヒイロは街中を歩いていく。と、今時分は昼時。パン屋らしき建物から、ふわーんとパンを焼く良い匂いが鼻をそそつた。そういえば、イシスの村を出る

時にシネアから弁当を貰つたな。ヒイロはつゝせつゝき今後の事をどうしようかと考えていたのにも関わらず、パンの焼ける匂いにシネアから貰つた弁当の事を考え始める。そらから、どこか座り弁当を広げられる場所が無いかと辺りを探し始めた。

（う～ん、無いなあ。飯処で食べてもいいんだけど。持ち込み禁止とかだつたら困るしなあ）

とつあえず、とにかく街の奥まで歩いてみる。公園なんかがあればベストなのだが、その気配はない。

わて、やつしたものかとヒイロがあちこち見渡していくと、なにやら裏路上らしき所に出てしまった。

猫などが通り抜けて行きそうな、その道。

家と家の間に出来たその空間は、少し狭いが誰にも見られないという絶好の場所であった。まあ、人前じゃ無ければここでもいいか？ヒイロはおもむろに置いてあつた空き樽にひょいと飛び乗る。何故、こんな人気の無い場所に空き樽が置いてあるのか分からなかつたが、ヒイロは気にせずシネアから貰つた弁当を広げ始めた。

「えつーっちょ、あんた、なんでそんな所で座つてんのよー？」

と、ヒイロがシネアから貰つた弁当を広げた瞬間。なにやらヒイロの真上から女の子らしき声がした。うえ？ つとヒイロがその声に顔を上げると…

「なつー～空飛ぶ美少女！？」って、うわああああーっ！？」

上空から、1人の美少女が空き樽に座るヒイロの真上に落ちてきた。

：：：：：

首都の名前は王都アースラル。世界で一番目に大きいとされる王国だ。北と南に長く広がり、東と西はその北と南の長さの約3分の2位の割合で広がる国である。緑豊かなアストリナムは地平線が少ない。荒野砂漠が一部あるものの後は、至る所に山々が突出していて、いわば日本といつ国を巨大化させたような国である。

「まったく、何よ。私は学校に帰りたいの！」

と、そのアストリナム王国の首都、王都アースラルの真っ白なお城の一室で何やら純白のドレスを着た少女が不満げに隣で紅茶をティーカップに注いでいる黒いメイド服の少女に話かける。

「やう言われましても…」

黒服のメイド、マリルは純白の姫に困惑の表情を向ける。

「こま世界はおかしな事になつてゐるのです。まあ一番目にくるのは、やはりモンスター達の暴走でしょつか…」

マリルのその言葉に純白の姫は、その事について考える。

モンスター達の暴走。

元来、モンスターとは人間の敵であり、剣を向けるものだと学校の古文で習つた。

だが、それも古文に書かれているくらいだから、当の昔。そう、約数百年もの昔の話なのである。いま『現代』の話をすれば、モンスターとは敵ではなく、森や山などの自然、人々の居ない場所に住む『動物』たちといった存在に近い。そして、そのモンスター達の中には人間と共に住み、暮らす者たちもいる。それを代表する例を挙げるならば魔術師たちの使い魔などが挙げられるだろうか。

使い魔とは、この世界に数少ないとされる魔術師たちの下僕またはパートナーといった所。彼らはモンスターで有りながら人に仕え、人に命を捧げる。

が、それほどまでに人間とモンスターが親密な関係を築くようになつた『現代』であつても、昔を忘れず、昔に生きるモンスター達も存在する。それらを俗に『古代モンスター』と呼ぶ。彼らは昔よろしく人間に反感を持ち、人間に對し敵対の念を持ち、質の悪いモンスターになると人間を食料として考える者も少なくない。そして、いま現在でのマリルの話によるモンスター達の暴走とは、この『古代』の思想を持つモンスター達が世に増え、人々を襲い始めているという話の事をいつのだ。

「だからって、私が学校に行けないのは別でしょ？ヴァースレイド魔術学院は、浮遊要塞よ！暴走したモンスターなんて入つて来れるわけないでしょ！？それに、学院の先生たちだつて…」

特に、学院長のウルヴァリル先生なんか最強の魔術師なんて呼ばれているくらいだし。と、純白の姫君が黒メイド、マリルに言つて

「いいえ、問題はそれだけではありません。一番田にくるのは、国交の問題です。特に我がアストリナム王国に敵対する国が戦争の準備をしてくると聞きました。そんな中、姫さまを学校へなどと国王さまがお許しになるはずがござりません！」

と、息も荒々しく語つた。

はあ、国王さまねえ…。と純白の姫君はため息をつく。そして、小物が置いてある小さな戸棚に手を向ける。そこにあるのは、ダイヤ、ルビー、サファイアなどで装飾された小さな王冠。それはこのアストリナム王国の国王の第7番目に位置する娘の証。

アストリナム王国・第7王女カレーナ＝アストリナム・トヨ・フォン・ド・ベルト。それが、この純白の姫君の名前。

「……」

ふん、何がカレリーナよーっと姫君は戸棚に置いてある王冠に向かい持っていたティーカップを投げ付ける。

（私の名前は、カレン＝ギースライド・シュフォンベルトよーずつと、ほつたらかしにしといて…何が今更、貴女はアリストナム王国の第7番目の王女でござります、よー？10年間もほつたらかしにしといて…）

よく言うわつ！？カレリーナ、いや、カレンはティーカップを投げ付られて中身の紅茶でびしょびしょになつた王冠を尻目にズバンとテーブルを叩き、立ち上がる。

姫さまっ！？と、マリルは王冠に紅茶を投げ付けた姫君にも困惑中だというのに、更なる姫君の行動に更なる困惑を強いられてしまう。そして

「私、街に出てみる……」

えつ？

マリルは姫君の言葉にいまいち反応出来ない。街に出る？街に出てみる？いま？すぐに？えつ？

そんな困惑仕切ったマリルを置いて姫君カレンはさつさと自分の部屋から出ていってしまったのであった。

：：：：：

「あきませんで、姫様！？わてら、クビにされてしましますう。ですか、首が飛びますう、現実的にい……」

妙な訛りの喋り方をする王宮の兵士が、アリストナム王国第7王女であるカレンを止めようと必死に彼女の行く手の前に出る。

「どうなさい！私は王女よ？！」と聞かないなんて、王族に逆らう気ー？」

カレンはそんな訛つた喋り方の兵士にズビシッと人差し指を立て命令を下す。

おどきなさい！？つと…

「そないなことを言われたかで、僕らは国王様に言われて王女様をお守りするのが仕事ですさかい。それを守らんかったかて、王族に逆らうことになってしまいまーす」

それでも、兵士は退かない。むう、とカレンは唸り考える。
わかつて下さいましたやろか？と兵士は安堵のため息をつく、と…

「なら、あんた私を護衛しなさい」

何ですと！？

兵士は姫君カレンのその言葉に固まってしまう。

ん？何よ、私を護衛するのがそんなに嫌なの？カレンはいぶかしげに固まっている兵士の顔を覗く。すると、兵士は困った顔をしながら

「あきません。わかつて下さい」

と、最初の言葉に戻ってしまった。

何よ、何がそんなに嫌なのよ？カレンはイライラと兵士の顔を睨み付けるが兵士は苦笑をするばかりで全くもつて話にならない。

「姫君、いま巷で噂になっている。怪人ギュソーを知つておいでですか？」

と、カレンが田の前の詫り喋りの兵士を睨み付けいると、後ろから

透き通つた声のした誰かに話かけられた。

「はっ！オルグ隊長に敬礼！」

そんな声の主がカレンの前までやつて来ると、訛り喋りの兵士がその声の主に敬礼をした。

王宮騎士団第7番隊隊長・リュースト＝オルグ隊長。背中辺りまで伸びた流れるような髪は銀色の綺麗な髪で、その白く透き通った肌はまるで陶器の輝き。だが、その美しさとは反例してその強さは王宮騎士団の中でも1、2を争うと言わわれているほどの人物である。

「怪人ギュソー？」

カレンはそのオルグの言葉に疑問の言葉を投げ掛ける。

「ええ、いま巷の下下の間ではその話で持ちきりです

オルグはそい言い、話を続ける。

怪人ギュソー。

それは朝昏夕。所構わず、出でくる魔性の獣。ある時は街を歩く女性に牙を剥き、ある時は家で留守番をする子どもに爪を剥ける。果たして、その正体は？心の病んだ殺人鬼？それとも、暴走し人間に牙を剥くモンスター？その姿は、おぞましく、奇つ怪で、どんな攻撃も効かず、どんな力自慢にも倒せない。奴を見たならば、たった一言。なりふり構わず、逃げるのだ！！

「とにかく、いま気軽に外に出ては危険なのです。いくら王宮の兵士だからといって暴走するモンスターなんかには太刀打ち……」

と、オルグが目を瞑りながら純白の姫君に街がいま危険である事を告げ。さっせと部屋に戻つて貰おうと、目を見開き純白の姫君を確認しようとした所。

「オルグ隊長……姫様、その話聞いたら俄然、目を輝かせて行ってしまいましたあ……」

「……おひ」

「おひ？」

「追えええーつーー早急に第7騎士団を召集して、姫様を追・う・ん・だあああーつーー！」

「あかん…冷静さが売りのオルグ隊長が…キレていらっしゃる…」

何よ、怪人くらい。カレンは王宮から一人飛び出し、王都アースラ

：：：

ルにやつて来てしました。

今時分は昼時。

街には人々が溢れ、至る所にある飯屋がガヤガヤと賑わっていた。それから、街を歩くとふわふわ～んとパン屋さんでパンが焼ける香ばしい匂い。

（あら、そういえばお昼の食事がまだだったわ。うう、お昼ご飯、食べてから出でくれば良かつた）

カレンは今更ながら、父親である国王の命令で、城にただ黙つて過ごしている事しか出来ない事に反発して勢いで出てきてしまった事に後悔をしてしまう。

ぐう～

と、カレンがそんな事を考えていると、お腹から壮大な腹時計が伴奏を奏でた。カアア～と、カレンは顔を赤らめ辺りを見渡す。どうやら誰も聞いていないらしい。ふう、良かつたつと、カレンは一人街中で安堵のため息をつく。

それから、街中を歩くとあつて純白のドレスでは目立つと、自分が持っている服の中でも一番地味な服（それでもやはり、ビニカの由緒正しい貴族のお嬢様的な豪華さを持つ）を選んで着てきた服のポケットに何枚かの金貨と銀貨がある事を確認する。

（パン屋さんはどこかしら？私、この街を歩くの、初めてなのよね。
……国王の娘……姫さまなのに……）

とことことカレンはレンガで舗装された通りを歩く。パンが焼かれ放つ、あの独特の香ばしい匂いを辿り歩いていく。

（あれっ？ 行き止まり？）

そんなカレンはビニカをびり歩いてきたのか、いつの間にやら壁を隔てた街の裏通りに出でてしまつ。そして、どうやらあのパンの焼ける独特的の香ばしい匂いはその壁を隔てた向こう側から匂つてきていたようだつた。

（あひう、全くなんて街なのかしら？私が行きたい方向に壁を作る

なんて…)

完全なわがまま化しているカレンの主張。お腹が減っているからなのか、それともこれが純白の姫君の地の姿なのか。ともあれ、カレンはそこらに置いてあつた空き樽を土台として高くそびえ立つ壁を乗り越える事にした。

(本当は貴族である、シュフォンベルト家の娘がこんなはしたない事、してはいけないのだけど……あつ、いまはアストリナム王国の姫だつたんだっけ……)

貴族も王族も、似たようなものなのでやはり、空き樽に乗り、片足を高く上げ、壁を股がり越えるなんて、はしたない事をやってはいけないので…

お腹が減りに減ったカレンにとつて、それは些細な事?で彼女はとりあえず、壁に股がり、ぴょいっと飛び越えてしまつ、が…

(えつ?なに、なんか壁の向こう側になんかいる?)

飛び越えて、ものの数秒。彼女は壁向こうの何かを確認してしまった。それは、黒いもの。黒い頭？ 黒い髪をした人間？ 黒い髪をした黒い瞳をした、なにやら弁当を広げている少年だった。

「え？」

「うえ？」

バツチシ、2人の瞳が合わさった。空中を重力任せに落ちていく少女と、それを空き樽に座り弁当を広げ見上げる少年。

「ちょ、あんた、なんでそんな所に座つてんのよ！？」

そして、やはり重力には逆らえない訳で、純白の姫君は漆黒の少年の真上におもいつきり、ダイビングしてしまつ。落ちた先の少年に文句を言おうと、顔を起こす少女。同じく、落ちてきた少女に文句を言おうと体を起こす少年。

「あんた…」

廻る廻る、何かが廻る。

「おまえ…」

廻るは、歯車。2つの小さな歯車。

「「そんな所でなにやつてのよ（んだよ）ー・?」」

廻る歯車は小さく、重なる歯車は少ないけれど。じじに2人の少年と少女の歯車が合わさった。それは、小さく小さな2つの歯車。だけど、それはやがて全てを動かし大きく廻る。そう、全てを廻すは、小さく小さな歯車が1番最初。それが、やがては全てを動かし廻る。大きな何かを動かし廻る。

物語りは未だ、始まりの鐘を打ち鳴らし始めたばかりであった。

第6話・君成す出逢い、御用心！？（2）

「信じられない…あなたなんで、こんな所でお匂い飯を広げているのよー！？」

何な訳！…つと純白のドレスでは無いが純白の姫君カレンは、体ごとダイビングしてしまった漆黒の少年に文句を言つ。

「知らねえよ！…関係ねえよ！…てか、お前に非があるとは考えねえのかよ！？」

だが、それに対して漆黒の少年ヒイロにも意見があつて、彼はひたすらに己の膝元で倒れ込んでいる純白のドレスでは無いが純白の姫君を睨み付ける。

「ううそいわねー！ううそこわねー！ううそいわねー！…私はいちいち回り道するのが面倒だったから、直進する為に壁を乗り越えようとしたのよー！悪いつー！？」

なんて、田の前の少女の見事な逆ギレヒロはややたじろぐ。

(いや…悪いだろ?普通にお前の方に非があるだろ?)

そんな訳で純白の姫君と漆黒の少年の果てしなく、譲り合いのない会話が延々と続く。バタバタとまるで仲の良い友達。バタバタとまるで仲の良い兄妹のよう。

「まつたく、私は貴族よ?それが、平民のあなたなんかに文句言われる筋合いは無いわ!」

「はっ!?貴族がなんぼのもんだ?俺の知ったことじゃないねっ!
だいたい、そのへんやパイのどこが貴族だつてんだ!?」

ズビシッヒロはカレンの心少ない胸元を指差す。

「なあ～！？ふざけじやないわよ！？へにゅぱいって何よ～？大きくなつたら、大きくなるんだからつ！？」

ヨ～ソ～ロ～…と、船の進路の如く、2人の会話も進路が変わる。ヘニゅぱい、ふにゅぱい、ペッチャ～ふにゅぱい！瞬間、ヒイロのその言葉とともにズバンという鈍い効果音。カレンの右ストレートが見事にヒイロの顔面にクリティカルヒットを決めた音である。

「まつたく～、なによ、まつたく～……」

ふんっ！とカレンは、未だのし掛かつたままだつたヒイロの上からひょいと降りる。そして、ぱっぱぱっと服のホコリを払い。

「ふん、平民の浮浪者のくせに……」

ちやりんちやりんとヒイロに数枚の金貨と銀貨を渡して、去つて行つてしまつた。

「…………」

あとに残されたヒイロは呆然とその場に座っている。いきなり現れて、いきなり去つて行った少女。よく分からないが、その少女は数枚の金貨と銀貨をその場に置いて立ち去つていった。しばし、呆然とその金貨と銀貨を眺めているヒイロ。と、彼は突如、その金貨と銀貨を握りしめ立ち上がる。

「……同情された！？」

異世界の住人、鏡緋呂。かがみ ひいら馬鹿にされても、同情される謂れは無いわっ！？ヒイロは手早くシネアの弁当を片付けると、急いで純白の少女が消えた方向へと走つて行つた。

通路を真っ直ぐ進み。裏通りから表通りに出でてくる。ヒイロは先ほどの中の少女を探して辺りを見渡す。だが、辺りは街を行き交う人々で少女を見付けることが出来ない。

「つ、なんだつてんだよ？勝手に人を哀れな住人にしやがって、そんなんに俺の顔は運無し顔か？ちくしょ～…」

そんな訳でヒイロは、街中を走り、名も知らぬ少女を探すこととなつたのだった。

：：：

カレンはぱつぱつと街中を歩く。

(どうしてかしら？ なんでかしら？ むう、なんで私はあんな見ず知らずの男にお金を惠んであげたのかしら？)

わからない。カレンは先ほど出会った少年の事を思い出す。黒い髪をしていた。今どき黒い髪をした人間は珍しい。というか、黒い髪の人間の話なんて昔の伝説か神話ぐらいの話なんかでしか聞いた事がなかつた。

(だから、かじらへうん、そうだわ。だからよ。珍しいかつたから、だから、思わずお金を惠んであげかけやつたのよ……)

そう、断じてあの少年のあの姿にあの顔にあの瞳に、心を奪われたからじゃない。ただし、黒い髪が珍しかったから……カレンはそう言い聞かせて当初の目的のふわふわーんと番ばらしい匂いを放つパン屋を指して、ひたすら歩いていく。

(……残したお金の方が、あげたお金より少ないなんて、なんか馬鹿っぽいけど……って、誰が馬鹿よつー？）

そんな独り言をぶつぶつと言いつぶは周りから見るとかなり奇妙で、そんな周りからの視線にカレンは気付かずじ、目的のパン屋までやってきてしまった。

『パン屋・よいどれ』

「……」

居酒屋のような、そうではないような名前。実際に判断に苦しむ名前だ。しかし、パンを焼く香ばしい匂いはこの店から漂つてくるし、なによりパン屋と書いてあるのだからパン屋に間違いないであろう。そんな事を考えながらカレンはおずおずと店のガラスドアを開ける。

カラソカラソと、パン屋のドアを開けるとドアに付けられていた鐘が音を奏でた。

「こひつしゃーい

パン屋は街中の向こうまで香ばしく良い匂いを漂わせるだけあって、店の中にはまあまあの客の数。店主の主人と親しき仲なか店の主人とペチュチャチャと話に耽る男の客と、2人の子どもを連れた母親の親子。それから、どこかの貴族の屋敷で働いているらしいメイドに近所に住んでいるらしい仲良さげな老夫婦がいくつかのパンを選んでいた。なにより、小さい店だ、これだけ人数が居れば儲かつていると言えよう。

とりあえず、カレンは店内を見渡して田舎でのパンを散策する。ふわふわ熱々の出来立ての食パン。中身は白くてふわふわでモチモチしていそうだ。次は小さいながらも歯ごたえのよさそうなクルミパ

ン。甘いクルミとプレーンなパンが合わさって絶妙な味を醸し出しそうだ。それから甘そうなクロワッサンやチョココロネ。チーズを乗せたパンもあれば、なにやらあれはどでかいバゲット?とともにかくにも、このパン屋には出来立てでとても美味しそうなパンたちが並んでいた。

「知ってるかい?なんでも昨日、そこの裏通りで怪人ギュソーに女性が襲われたらしいよ」

と、カレンがいまにも口に入れたくなる美味しそうなパンを選んでいると、なにやら先ほどの店主と話していた男が昨日あつた噂話をしあげ始めた。

「ああああ、知ってるとも。なんでも、居酒屋アルテミの従業員の女の子が店裏の『アミ』捨て樽に『アミ』を捨てようとした所に襲われたらしいね」

2人の話にカレンは王宮で聞いた話の事を思い出した。

怪人ギュソー。それは果たして何者か?心の病んだ殺人鬼か?それ

とも暴走するモンスターなのか？昼夜を問わず現れる。それは、まがまがしく、奇つ怪で、どんな攻撃も効かず、どんな強者でも倒せない。

「これ頂くわ…」

「あっ、まいど～」

カレンはいくつかのパンを選び、店主のいるカウンターまで進む。値段分の銀貨を渡して、カラソカラソと『パン屋・よいどれ』をあとにする。それから、いくつかの出来立てのパンを胸に抱え、カレンは考える。

（本当に怪人ギュソーなんていたのね。オルグ隊長の嘘だと思つたけど…）

そこでカレンは、先ほどの裏路地での少年を思い出す。そついえば、なぜ彼はあのような裏路地に座つていたのか。それから、見たことのない出で立ちと、ぼろぼろの服装。思い出せば、思い出すほどに何やら怪しい感じがしてきた。まさか、あれが巷で有名になつている怪人ギュソー！？カレンが何の気なしにそんな事を考えてしまつていると

「おー、ちゅう、お前！？」

後ろから何者かによつて肩を掴まれ呼び止められてしまつ。ドクンと体をはね上がらせ、振り向くと、そこには先ほど黒い髪と黒い瞳の少年が立つていた。

：：：：：

見つけた！

ヒイロは、先ほど少女をパン屋から出てきた所をやつとの想いで見つけ出した。

軽くウエーブがかかつた桃色のブロンド。瞳も薄い桃色で、その唇も同じくやや薄い桃色。背丈は自分の胸元辺りまでしかなく小柄。

紺色の洋装に同じ柄の帽子。チノクのスカートがやや淡いグリーンなのがミスマッチで暗い印象を与える服装だが、そのどこかキラキラした姿はやはり金持ちのお嬢様っぽかつた。

(まあ、見ず知らずの俺に何の躊躇い無しに金貨銀貨を投げ付けるんだから、金持のちのお嬢様なんだよな…)

とりあえず、ヒイロは彼女がまたどこかに消え失せてしまつ前に捕まえなくては、と少女に話し掛ける。

「おー、ちゅう、お前!」

ヒイロは小走りで少女の近くまで近づくとポンと胸を掴む。すると、彼女はビクンと体をはね上がりさせ、ふるふると頭をこじらに向ける。

(……なんでハイシは、こんな挙動不審なんだ?)

ヒイロが分かるはずも無いのだが、少女は今しがた、巷で有名な怪人の事を考えていた。そのため、いきなり知り合いもいない街で肩を掴まれたので、一瞬、怪人が自分の前に現れたのかと思つてしまつたのだ。

「あっ、ああああ、あんた、なによ？」

いや、なによと言われても、お前が何なんだ？ヒイロは少女の異常なまでの警戒心に頭を傾げる。

「まあ、いいや。ほら、さっきの金銀貨！俺は見ず知らずの奴から金を恵んで貰うなんて趣味はねえよ！」

ヒイロは彼女に、持っていた数枚の金銀貨と銀貨を渡そつと手を差し出す。

が、彼女はそれを受け取らない。んだよ？ヒイロが頭を再度傾げて、少女の顔を見ると…

「あんた、私の物が貰えないっての！？」

なにやら鬼気迫る表情でヒイロを睨み付けていた。なんですか？なんなんですか？何が何でなんなんですかー？とヒイロはその桃色少女の鬼気迫る表情にビクンと両手と片足を上げながら驚きの表情を表す。

桃色の少女カレンは、何やらムカムカしていた。何がこれ程までに自分をムカムカさせるのか彼女自身分からない。

さして理由を挙げるならば、この少年。そう目の前のこの少年にあるのだとカレンは思う。確かに、見ず知らずの人間にお金をあげるなんて変だ。変だし、おかしい。そりや、そんな物、せつせつと返却するのが当たり前。だが、何だか、何だか…

（ムカつくのよね。普通だつたら、ハイそうですか～ってお金をむしり取つてスッタカタ～って行くんだけど。何か、いまコイツからお金を返却されるのは許せない気がする。なんか、貴族つてか王族

つてか、私のプライドが許せないのよね……なんでかしら？でも、なんか分からぬけど……ムカムカ～ッ！…）

そんな訳でカレンは少年に背を向け走り出す。少年が『えっ？ ちょっと、待てよ！？ ふざけんな、なんで逃げんだよ！？』なんて言つて追いかけてくるが気にしない。カレンはひたすらに少年に背を向け走り出す。ツタカ、ツタカ、ツタカタ～なんて擬音が似合いそうな走り。

「馬鹿かあ～！？ んだよ、なんだよ、なんなんだよ、おまあーつ！？」

その後を、そんな感じで追い掛ける少年。ここに奇妙な鬼ごっこが始まつた。本気で逃げる必要があるのか疑問のカレンと、何も言わずに貰つて置けばこんな苦労をしなくてすむヒイロ。2人はお腹が減つていたにも関わらず、そんな事をすっかり忘れ、しばし、奇妙な鬼ごっこを夕暮れ時まで堪能したのであつた。

第7話・君成す出逢いに、御用心！？（3）

夕焼けが街を焦がす。淡くオレンジに彩られた街の中央公園。噴水がその淡いオレンジ色を反射し、輝いている。

「……疲れた」

その噴水の脇に置いてあるベンチに座る黒髪の少年は、ぐたりと背中をうなだらせて、空に上がる薄い月と地に下がるドロリと肉厚の太陽眺めていた。

「主よ、せいかぐの金だ。貰つておこなはざつだ?」

そんな黒髪の少年に、脇に立て掛けある布切れ、もとい黒い刀身の魔剣がそう言葉を掛けた。

「呑つ……」これはアレだ？一種のケンカだ？貧乏人と認めたくなく
ば、私を探してお金を返しなさい……つう、あの女の俺
への挑戦だつ！？」

どうやら魔剣であるアイゼルの主は、長時間に渡る少女捜索による疲労で少々おかしな妄想に取り付かれてしまっているようだ。最初は常識の名の下で始まつた彼の少女捜索であつたが、……どうも、いま現在となつては、もはやそういう理由では無さそうだった。主である少年は考えた。この自分の手の中にある数枚の金貨と銀貨は何なんだろうか？何故、彼女は見ず知らずの見た目、こんなボロい服をきた一見、浮浪者とも思える自分に金を渡してきたのだろうか？

「一見、浮浪者。つまり、それは同情されたって事だらう？あははははは……」

渴いた少年の笑い声が辺りに木靈す。

『ふざけるなつーっ』

少女がいつたいどういう理由で金を渡してきたのか彼は知らない。魔剣であるアイゼルにも分からぬ。だが、見ず知らずの人間にいきなり理由も無しに金を渡された少年は『馬鹿にされた』と感じた。そして、彼はその馬鹿にされたという負の感情を抱いて、夕暮れの街中をさ迷い始めた。そう、このままでは終われない。なんとして

もあの少女をとつ捕まえては金を返却しなければならぬ。

『超マジふやけんなつ……』

さつやつと黒髪の少年は、公園のベンチから立ち上がり、肩で風を切りながら、再びあの桃色髪の少女を探し始めたのであった。

：　：　：

夕焼けも夜の闇に勝てぬと分かつてか、空は次第に青みがかり、やがて黒いカーテンをしいたように薄暗くなつていつた。そんな夜の始めに桃色髪の少女カレンは一人、レンガで繕えた街中を歩いていた。

「どうしたものかしら？お城が街のどこから見えると行っても、道

が分からなかつたら、辿り着けないぢやない…」

カレンは、街の真ん中にズテンとそびえ立つ真っ白な城を見上げて、ため息をつく。

『迷つた』 カレンの脳裏にその言葉が浮かび始めて約一時間が経過していた。と、そんなカレンの脳裏に街で出会つた黒髪の少年の事が思い浮かべられる。そう、だいたい、あの少年が悪いのだ。あの少年が自分が渡したお金を素直に受け取らないから……。

しかしながら、何故だろう?ふと、少年への理不尽な怒りを覚えたところでカレンは、何故、自分はあの少年にお金を渡してしまつたのか疑問に思つてしまつた。思えば、彼と自分は初対面。もちろん、カレンに初対面の男に金を無条件で譲渡するなどといった趣味はない。では、何故か!? 実際のところ、当のカレンにも理由が分かつていなかつたのであつた。

「あら?貴女はアストリナム王国で最も鎧び付いた貴族、シユフォンベルト家のミス・カレンじゃなくて?」

カレンが夕暮れ過ぎの街中で初めて出会つた見知らぬ少年の事に思い馳せていると、横から少女らしき声がカレンへと話し掛けられた。

「うー? そういうアンタは、魔術学院で何かといつも私に

突つ掛かって来るミゼ・ラブル家のミス・フローア…？」

少女の名前は、フローア＝ミゼ・ラブル。世界・西に位置する第6王国ラミテスの貴族で、水の系統である呪文を世界一得意とする貴族のお嬢様である。

貴族でありながら、魔術界でもエリートとその名は知られ、超が付く程の上流階級貴族のお嬢様を目の前にカレンは、半歩後退りする。このフローアは、魔術学院でも1、2を争う魔法の使い手で自身『神の子』とも言われるカレンのライバルとも言える存在であった。いや、魔法の能力だけならまだいい。彼女はその超上流貴族という家柄、プライドが高い。ことに魔法で優秀な家系と来たら、貴族の末端と言えるカレンの貴族名・シユフォンベルト家と肩を並べている事に、その優秀な家系のプライドが許せぬらしく、彼女は何かとカレンにちよつかいを出してくる人物なのである。（カレンが王族であるという事は、学院では秘密になつている）まあ、詰まる所、フローアとは、犬とも猿とも付かぬ仲なのである。

さて、当のフローアというと、その小さな体をズデンと張り、カレンを睨み付けていた。ブロンドの髪に、癖つ毛なのか、みょんと立つた前髪は独特で、きらりと光る『テコッ』ぱちに巻き巻きに巻いた後ろ髪はまるでドリルの様だ。それでいて、それを小さな体いっぱいに伸ばしているのだから、ド派手な事極まりない姿である。

「ところで、ミス・シユフォンベルト？」

「えつ？」

カレンがフローラとのこれまでの関係を思い返していくと、不意にフローラがカレンに質問をしてきた。

「貴女、もう、使い魔の使用には慣れた？」

瞬間ビギリッとカレンのこめかみに力が入る。

「使い魔って魔法と違つて思慮や意識があるじゃない？生き物である訳だし食事だつてするし、教育をしなければ契約者にも歯向かう訳だし。まあ、その点、わたくしのクロウベちゃんは、わたくしの教育もあってお上品にかつ強力に　　あつーそういうえば、貴女、使い魔召喚の時に失敗してましたわね？あら？…あらあら？わたくしつったら、まあ、まあまあー？」

わざとじりじりとフローラは、驚いてみせる。が、その顔はいやに嬉しそうでほくそ笑んでいるのがカレンにも確認できた。その顔のこ

ともあつてかカレンは、力を入れたこめかみに更なる力を入れる。それは、もうはち切れと言わんばかりに…。

「えつ……ええ、ええ、そうよ、私つたらあの時、あの馬鹿なブリフナルトの大馬鹿男のせいで使い魔召喚を失敗したわ」

と、カレンのその言葉にほくそ笑んでいたフローアの顔がより一層笑顔に変わる。

魔術学院での使い魔召喚。

これは、学院の魔術師が2学年に上がる頃に実施される言わば魔術師の登竜門。魔術師の使い魔とは、その名の通りに下僕として使う手下であるが、時にその命を預け、如何なる危険も共に歩み行く、信頼出来るパートナーでもあるのである。そのパートナーの力が、強ければ強いほど主人である魔術師の力であり、まさに魔術師の魔術師としての力を計るバロメーターであることは必至なのであつた。が、しかし、カレンはこの魔術師たる魔術師のバロメーターの召喚に失敗をしている。この失敗の意味する所、彼女には並みの魔術師の才能さえ無い、という不本意な評価を受けることとなるだ。

「うふふ、これは失言でしたわ…」

フローアの笑みがカレンの脳内への血流を激増させる。呪喚術の成功した自分と失敗した貴女。魔術学院での1位は自分であると言わんばかりにフローアは、カレンへの態度を大きくする。

「ええ、ええ、でもね、ミス…」

だが、そこへ、カレンが更なるどす黒い笑顔でフローアに顔を向ける。

「うふ？ 私つたら、王室の魔法特区で、古代魔法での使い魔召喚をしたのよね？」

「ふえっ！？」

一瞬、フローアは耳を疑つた。『え、なに？ 魔法特区…？』

『魔法特区』とは、ありとあらゆる魔術的因素が絡み合つ秘境である。魔術とは世界に準ずる元素の妖精達によつて創られるもので。例えば、炎の魔術を使いたくば、炎の精靈と契約しなければ、いく

ら高名な術者であろうと、その力は扱えない。なぜなら、素となる炎の妖精達が術者に従わないからだ。つまり、魔術とは内なる己の魔力と外の妖精達による外的要素が無ければ発生しないものなのである。が、それにも例外がある。例えば、魔王といった魔力の最も高い術者の場合。（魔力の最も高い魔王と高名な魔術師の違いは、ここでは置いておくとしよう）

彼らは、『並みの魔術師』とは違う。精靈との契約や妖精達の意思に關係無く魔術を発生させる事が出来る。これを俗に、古代魔法と言つ。そして、この古代魔法は何も魔王だからこそ出来る所業ではない。魔力の異常に集まる『魔法特区』でこそ成せる業。そう、魔術的要素が濃密な『魔法特区』では、ある程度の術者であれば魔方陣を使い、現代魔法における『精靈との任意的に起こる魔法』という概念を度外視し、己個人で起こすことの出来る古代魔法が使えるという事なのだ。（詰まる所、常識を置いて、自分勝手に魔法が使えるということ）

「魔法…特区…古代魔法…？」

そして、それほどのリスクと労を加えて行われる古代魔法とは、いまは忘れた現代魔法の原本の一部。その力は現在の魔術者達が操る現代魔法を遙かに凌ぐ強力な術なのである。

だが、その為、『魔法特区』も砂漠、断崖絶壁、深海の底など、極めて困難な場所にあり、その例で無い場合は寺院を建てたり、王宮の一室にしたりと、誰彼構わず訪れる事の出来ないようにしてあるのだ。もちろん、たかだか魔術学院の1、学生が入れる場所などではないのだが：

「何故！？どうして！？そんな馬鹿な話が信じられる訳！」セイマセんわっ！？」

秘密とはいって、カレンは王室の姫君。王宮にあるありとあらゆる部屋に入る事は容易なことなのである。しかし、そんな事とは露とも知らずプライドの高い上流貴族のフローアは驚きの声と否定の言葉を咄嗟に吐き出してしまう。

「はっ！？わたくしとした事が、あまりに馬鹿げたお話に取り乱してしまいましたわ…」

フローアは、すぐにそれはカレンのハッタリだと分かり、驚きのあまり崩した体制を元のド派手なこと極まりない姿へと戻す。

「だ、だあいたい、もし、そのお話が本当の眞実の誠せじとなりば、お見せなさいよ？」

「くつ？」

「くつじやないわ……貴女魔法特区で召喚したんでしょう？」

あまりにも予想外な言葉であった。見せる？何を？使い魔を？ぐるぐると廻るカレンの思考。だが、答えを見いだせない。それもその筈

「あら、まさか？し・uso！？な訳ございませんわよね？」

そう、嘘なのだ。いや、半分嘘というのが本当であろう。魔法特区で古代魔法、この2つは確かなのだが、使い魔の召喚には至らなかつたのである。つまり、カレンは魔法特区で古代魔法で召喚術までしたのに、再び、失敗したのである。

(言えない……失敗したなんて、口が裂けても裂かれても言えないに
よ……)

ガクガクぶるぶる、カタカタと小刻みにカレンの体が震える。

「 わあ、お出しなさい…？」

ズン！ズンズン！…とフローラがカレンへと迫る。

「う、う…」

「うごいいい、じゃ「ゼロ」ません…わあ、わあ、わあ…？」

もはや、どうしようも出来ない状況。言つてしまつたが最後、失敗したなんて…。怒涛に迫りくるフローラ。カレンの顔が青くなる。あれだけ見えを切つて、失敗しましたなつて言えない。もし、言つてしまえば自分は、それこそ末代まで語り継がれる恥…！そんな、汚名は嫌だ。しかし、ここで見せないと、またそれも同じ。ぐるぐるグルグルと回り廻るカレンの思考。そして、ついにカレンは重たい口を開く。

ふるふると右手を挙げて、青い顔のまま

「……アレ」

「えつ？」

「どれ？」

小さな嘘を隠すための大きな嘘。……カレンは、追い詰められ追い詰められた末に、自分を探し、街を徘徊していた1人の黒髪の少年にへと目をつけたのであった。

第7話・君成す出逢いで、御用心！？（3）（後書き）

久しぶりの更新です。お久しぶり、こんなにまだ、「ごめんなさい」…。調子の良い後書きなどを見て、更新してない自分の作品を見るのは…「ごめんなさい」。

急け者です。いえ、文章やアイディアが浮かばないという理由もあるんです……あ、こっちは、馬鹿者つて事ですね。「ごめんなさい」…

とにかく、まだ頑張ります。長いお待ち頂けると幸いです。では、失礼します。

第8話・君成す出逢いで、御用心！？（4）

薄く平べったい月の光が、夜空を照らしている。

街灯が所々に並ぶ街では、星は数多く見ることはできない。だが、それでも不夜城という訳にはいかないのだろう、早々に明かりを消した街には一部を残して静けさが漂つ。

（……この国の街灯って、どうこいつ風になつてんのかな？電気な訳……は無いよな？やっぱ、油かな？あ、魔法だつたりするのかな？）

そんな静けさの漂う街道に黒髪の少年が、ぱつぱつと歩いていた。

体に纏うボロ切れは凄まじく、背中に刺した布切れは、やはりボロであった。そんなボロボロの少年ヒイロは、こんな夜中に宿も取らずに街中を徘徊していた。

（はあ、しかし、なんで俺がこんな田に合わないといけないんだ？…あの女。そうだ、すべてあの馬鹿女が悪いんだ）

ヒイロは、この事の発端である桃色髪の少女の事を思い出す。

そう、そもそも自分が、こんな夜中に街を徘徊することになつたのも、こんなみすぼらしい姿になつたのも、あの馬鹿女、あの桃色髪をした少女の所為なのだ。ボロボロの衣服を見て彼はそう思った。そして、この街に到着した頃の自分を思い出す。確かに、あの時も衣服とは言えないぐらいに服はボロだった。しかし、からうじて

あれは服であつた。しかし、しかしだ。いま、自分が着ている物は何であるつか？ボロだ。いや、ボロボロだ。羽織つたマントは、ボロ雑巾。穿いたズボンは穴だらけ…。

もはや、これは服と言つより、布切れである。

ヒイロは己の姿にガクッと肩を落とす。同時に夜で良かつたと心からそう思つた。こんなみすぼらしい姿は、大衆の前でそつそつ晒せるものでは無いからである。

「ボロボロだな、主よ？」

背中に差した魔剣・アイゼルがヒイロに問いかける。

「つるさい…しそうがないだろ？あの野良犬どもが好き放題やつてくれたんだから…」

「ふう、オオカミにさえ勝つたといつのに、ノラ犬には勝てぬのだな、主よ？」

主人であるヒイロのあまりにも無残な醜態にアイゼルが軽くもため息をつく。それに、対してヒイロはムスッと、しかめつ面をするが、何も言わず無言のままで歩みを速める。

路地裏先の野良犬横丁。

ヒイロは、ここまでのことと思い返す。ヒイロは桃色髪の少女を探す上で、町中の至るところまで調べ尽くしていた。

この広大な城下町は、本当に馬鹿みたいに広く、端からは端まで

行くのにも、かなりの時間を要した。しかも、この街の真ん中に、これまた馬鹿みたいにドでかいお城があるのだが、どうやら、それを守るために、街には色々な仕掛けが施してあるようなんだ。敵が簡単に城へと、たどり着けないようにしてあるのだろう。そのせいで街は、さながら迷路。しかも、この迷路のように入り組んだ街には、地図というものが、まったく見当たらなく。その為、ヒイロは泣く泣く普通の道を無視して、前へと進むしか無かつたのである。

そして、そこへ路地裏先の野良犬横丁だ。

さながら迷路のような城下町。いちいち行き止まりになつたからといって、元の道に引き返してまた別の道を行くなどと毎回毎回、同じことを繰り返していくには、日が暮れる……ビコリでは無いのだ。

そこで、ヒイロは考えた。

その行き止まりの向こうには、同じく道がある。しかも、後戻りをして別の道を辿つた結果の道らしい。ならば、話は早い。乗り越えれば良いのだ。そういう訳で、ヒイロは、同じその姫君と同じ結論に至り、行き止まりの路地裏に置いてあつた、コマ捨て樽に足を掛けて、堀を乗り越えることにした。

と、まあ、そこまでは良かつた。そこまでは良かつたのだが、その乗り越えた先。そこにあつた物。

それは、確かに道。次へと進むことの出来る表道であつた。そう、その目の前に居た数匹の体格ある『野良犬たちを越えた先にある』のオマケ付きではあつたが……。

後は、お察しの通り。堀を乗り越えた先で、勢い良く野良犬たちの上に乗り込んだヒイロ。そんな彼を、その野良犬たちがアレやコレやと噛みつき引っ搔きの大騒動。命からがら抜け出したヒイロであつたが、見るも無残に、生傷とボロ切れと化した衣服のなれの果てであった。

「ええい、ちくしょう……これも！……どれも！……あの馬

鹿女の所為だ……見つけたらただじやおかねえ！？」

もはや、ヒイロがあの少女を探す動機は、怒りへと変わつてしまつた。

いきなり、同情という憐れみを下され、有無も問わぬ渡された金貨と銀貨。それから、その後の、金貨と銀貨を返却しようとした時の、あの態度。そして、今に至るこの苦労。もはや、お金を返却するだけの事柄では済まない勢このヒイロなのであつた。

「……おほこなひこみーー。」

「？」

「ああ、ああ、ああーー。」

と、内心ムカムカのヒイロ。そんな彼の耳に向やう話しが聞こえる。

(はてな、こんな夜中に話しが？)

（こんな真夜中の道先で、向いつの道から話しがする。まだ、夜

も早い時間だが、今まで人っ子一人見ない状況での話し声。一体、なんだろう？と、ヒイロは、恐る恐る声のする壁に向こう側の道を覗き込んだ。

「一」

そこに居たのは、桃色髪のあの少女…それと、もう一人。金の髪色をした背の小さな女のお子が桃色髪の少女の前に、それは偉そうにドテンと立つて居た。

（はっ！？見つけたぜえ、「ノノヤロウ！？」てめえ、見てろよ！？いま、この右手に持った金貨銀貨を、その鼻つ面前に突き返してやる！）

ヒイロは桃色髪の少女を見つけるや否も、金貨銀貨を握り締めた右手に入れて、ドスドスと桃色髪の少女のもとへ歩みを始める。

疲労困憊、その身もボロボロ。そんなヒイロの恨み辛みが相俟つて、その握りしめた右手に集まる。

風を切り、颯爽と目的の少女の元まで歩いて行く。少女との距離がみるみる縮まる。すると、そんなヒイロに桃色髪の少女は気づいたらしく、ヒイロの顔を見て、その目を大きく見開かせた。どうやら、驚いているようだ。

ふふん、と得意満面なヒイロ。今に見てる、目の見せてくれ。ヒイロは意気揚々と彼女の元へと、歩みを速める。

「…あれ」

「えつ？」

そんな瞬間、桃色髪の少女が、ズビシッとヒイロの方へ、人差し指を突き出したのであった。

：：：：：

あれ？　えつ？　どれ？　魔術界切つての水の系統魔術のエリー
トである、フローア＝ミゼ・ラブルは、頭の中にクエスチョンマー
クを描いて、更には頬に指を当てて、くにやりと首を傾げる。
だが、しかし、そこに居たのは何ともみすぼらしい姿をした浮浪
者のような男であった。服は引きちぎれ、布切れと化して、顔は薄
汚れ、はつきりと男の顔さえ確認出来ない。

(それで、どこかしら？わたくしのライバルである神の子とも言わ
れるカレン＝ギースラайд・シュフォンベルトの使い魔は…？)

まさか、こんな汚らしい男が、それだなんてフローアは、天と地
がひっくり返っても信じられない訳で、きょろきょろと辺りを見渡
す。

だが、そこには誰も居ない。…否、彼しか居ない。

(えつと、つまり?)

どういつ事かしら？と、フローアはカレンの方へと体を向けるが、
彼女は先ほどと同じ恰好で、即ち、その薄汚いみすぼらしい男を指
差したままの姿で、立っていた。

それにさらなる困惑を増して、フローアは黒髪の浮浪者と桃色の
カレンを見比べる。そして、何度も何度も見比べている内になんだ
か可笑しくなってきて、自然と笑いが込み上がってきたのだった。

「ふつ！？ふつ、うふふふふ…うふふ、うふふふふふ、あつは
？あははは、あはははははつ！？そうですの？これですの！？」

と、フローアがそんなヒイロの姿に高い笑い声を上げた。そんな
フローアに対してカチン！？とヒイロは、不快な感情を抱く。これ
？ 初対面の人間に対して…これ？

「アストリナム」、古くからあると言われる貴族である貴女の使い魔が、『それ』ですか？」

今度は、ガチーンと鳴った。この女は、人の事を見るなり、『あれ』だの『これ』だの『それ』だと、なんと不愉快な…。ヒイロは、笑いながら自分を横目で確認していく金髪の少女に強い不快感を表す。

「まったく、ミス・カレン？嘘を付くにも、もつとマシな嘘を付きなさいな？」

フローアは、ひらひらと片手を中でひらつかせて御[冗談を]とカレンの言葉に嘲笑を送る。

「……」

それに黙つて、フローアの態度に顔を俯けるカレン。

「……あら、ミス・フローアともある貴女が彼の姿形で早計なご判断ね？」

「え？」

と、しかし、今度はカレンがフローラに對して顔を上げて、嘲笑とひらひらと片手をひらつかせた。

「ビハニウ…意味かしら?」

そんな不敵なカレンにフローラが眉を顰める。カレンはフローラが眉を顰めたのをじつと確認すると、ふつ、と軽く笑みを浮かべて…

「私の使い魔は、普通じゃなくてよ…」

ズビシッヒ、その右手の人差し指をフローラへ突き出したのだつた。

第9話・構成の出逢い、御用心ー？（5）

ぬうと差し出した手には、金銀貨が握られていた。出された手に驚いて、咄嗟に出してしまったカレンの手にそれは渡され、少年はよつやく解放されたと深いため息をつく。

「だは～っ、疲れたあ。今日一日でこの街の全部回ったんじやないか～りくしょ～…」

黒髪の少年ヒイロはばぐつたりと地面に座り込み、両膝に両腕をあてがい空を見上げる。『あ～、星がきれえ～』なんて言つたりして、なにやらやつ遂げた満足感を満喫していくようだった。

「……ふ、ふん。なによ、馬鹿みたい？ いちいちお金返しし、くへへへへるなんて… よつ、よよつけめど、私に会いたかったのかしら？」

はて、この馬鹿女は何を言つとるんだ、この馬鹿女はつー？と、

ヒイロはカレンのその言葉においてきりに不快感を表し、立ち上がる。

「ふざけんな……」おの…犬ちくしょー！？俺はただ単に得体の知れない女からの金なんて受け取りたく無かつただけなんだよ！…」

「なつ！？ななな、なんですつて～！？いつ、いいい、犬犬犬、犬ちくしょ～つ！？」

「何言つた？何で言つた？何を言つたのかしら、この馬鹿男はあ～つ！？」

国が数ある貴族の中でも最も古いとされる、シユフォンベルト家の才女に向かつて、この馬鹿男ときたら、い、いい、犬ちくしょ？犬ちくしょ、と仰りましたか、この、どですかん！？仮にも平民の分際で、き、貴族である私を犬とは、犬とは、犬とはとわああーつ！？

ぶるぶると肩を揺らして、怒りに燃えるカレン。もう、一言…。この馬鹿男にものすげえ事を言わないと気が済まない。カレンは大きく息を吸い、口を開け何かを言わんとする。

が、馬鹿男ならぬヒイロは、さうさと元来た道を引き返そうとくるじと体を翻した。

「て、えつ？ ちよつ、待ちなさいよ！ ねえ？ ねえてばあ！ ？」

しかし、ヒイロは振り向かない。スタスターとカレンの言葉を無視して暗闇の中へと消えていく。…と、そこでカレンは、ハツとする。暗闇？ 暗い？ 夜なんだ！？

街灯が光を灯すが、それはおざなり程度。昼間のような明るさはない、夜の闇がそころかしこに漂っていた。

ぞくりっとカレンの背筋に悪寒が走る。街中には自分以外に人つ子1人居ない。道は前も後ろも一寸先は闇。ゾクゾクッとカレンの体全体に寒気が走る。

いやいや、あれはただの噂だ。

夜、子どもが出歩かないようにするための作り話だ。したがつて、私は大丈夫。というか、私は世界でも数少ない魔術師。いや、その生徒だけど。しかし、魔法は火・水・土・風・光・闇の6系統すべてを操る事の出来る『神の子』と呼ばれた天才である。怪人なんて、そこらの凡人…目ぢや無いの。赤子も同然なの。だから、だから……

「ちよとおおおーっ！？待ちなさいよー！？お、女の子をこんな暗闇の中に1人にする気なの〜？ちよつ、ちよつと〜…」

カレンは一寸先の闇に消えたヒイロを追いかけ走る。

幸い、ヒイロは歩いていたので、そこまで遠くには行つていなかつた。そんなヒイロを見つけて、スタスタとカレンは足早に近づいていく。

「……なに？」

だが、ヒイロは自分の腕にしがみついてくる桃色髪の少女にやや冷めた視線を送る。

そんな視線のヒイロに桃色髪の少女カレンは頬をぱくらうと膨らませて、何よつ?と睨み付けた。

「お、おおお、男の子なんだから。おおお、女の子の私を家まで送り届けるのは義務でしょ~?」

「……はあつ?」

ヒイロはそのカレンの言葉に眉をしかめる。何を言つとりますか、女の子?知らない男の子に家まで送れど、女の子?男はオオカミなのよ、女の子?そんな私めに『えすおーえす』ですか、女の子?

「……な、なによつ?文句ある?私はこの國のお姫さまなのよ?王族に仕えるのは國民の義務でしょ~?」

「…まあ？でか、お前、最初に貴族って言つてなかつたか？」

「そうよ、私はアストリナム王国で最も古い貴族であるシコフォンベルト家の才女よ！—それでもひつて、アストリナム国王の二番目の娘なんだから…！」

「…こんな肩書きを……持つてんだねえ～」

ヒイロは、ひしひと自分の腕にしがみついているカレンに疲れた表情をさせむ。もつ、なんか、脱力感が体を支配するのだ…。

一日中、馬鹿みたいに歩き回つたあげく、なにやら変な女の子に絡まれては…こう、ノロノロと歩みも遅くなるのも仕方が無いことなのであつた。

「ちょっと、もっと早く歩きなさいよ…？早く帰らないと、怪人ギュソーが出てちやうじやない…！」

しかし、グッタリしたヒイロにカレンは容赦のない言葉を投げか

ける。

「……はあつー？」

それに対しても、ヒイロはやや訝しげな表情でカレンを見つめる。そして、こういうのって、いわゆる……痛い女ってやつ？と、ヒイロは哀れむような視線をカレンに送るのだった。

「なつ、痛くないわよ！？なによ、痛い女って？痛くないわ、痛くないもん、痛くないだもん！？」

「いや、怪人つて…」

どうやら、心の中の思いが口に出でたようだ、それを聞いたカレンが不機嫌に大きな声を上げる。

が、そんなカレンにヒイロは悪びれた様子もなくスタスターと夜道を歩いていく。それに付いて歩くヒイロの腕にしがみついているカレンはやや歩き難いのか、時々足元がこけそうになるのだが、その手を一向にヒイロの腕から、離そうとはしない。

「ちょっとまー、もーとゆりへ歩きなよこねえー?」
「なつたじゃない?」

「早く歩けとか、ゆっくり歩かとか、どひどすよ?」

「まったくもってわがままなカレンに、こいつ、痛い女じやなく、
面倒くさい女だったのか…と、ヒイロは改めてため息をつくのだった。」

さて、何故にこのような状況になつたのか…。カレンは、薄明
かりと真っ暗闇の夜道の中、これまでの事柄をまとめる。
水魔術の使い手・フローア＝ミゼ・ラブルとの口論は、一様の決
着は着いた。

使い魔召喚の失敗から、古代魔法で人間である、この黒髪の少年
(どうやら名前はヒイロと言つらしい)を召喚したと、フローアには、
は、そう言い訳をしたのだ。しかも、そんな、自分の話に、みすぼ

らしく現れたヒイロを見たフローアが失笑をした為、それを自分は大胆不敵にも自分の使い魔は普通では無いと大見栄を切つてしまつ。

まあ、そのおかげでフローアは…

『よろしいですわ。ならば、見せて貰いましょうじやないの？貴女の使い魔の強さ…』

と後日、魔術学院にて、その使い魔の強さを見せて貰おうではな
いかと、その場を去つて行つた。

の、だが、後に残された自分が、自分のついた嘘偽りが、まずは
その場でバレなかつた事にホツと胸を撫で下ろしたのも束の間、よ
くよく考えてみるとそれは唯の時間稼ぎで、しかも、もはや、この
黒髪の少年を自分の使い魔と言つてしまつたのだから、もう、これ
から、彼以外の者を使い魔を変えようにも変えられない事に気が付
いてしまつたのだ。

そんな訳で、仕方なく、このみすぼらしい少年をどうにか本当に
自分の使い魔にしようとカレンは一計を考えているのだが…。

「… で、エリまで着こなせるの、お前?」

じつにも彼は、一刻も早く、自分から引き離れたいようだった。

：：：：：

どれくらいの距離を歩いただろうか。手指したのは街中央にある大きなお城。街のどこからでも見えて、そこを手指せば良いと言われば間違いない真っ直ぐに進んで行ける手印である。ハ。

だが、そんな、ビデカイ手印を手指していたはずの、一人。ヒロとカレンは、田の前の光景にしばし、呆然と立ち尽くしていた。

「……ねえ」

先に声をかけたのは桃色の髪をウエーブに靡かせた少女・カレン。彼女は、ぽりぽりと首筋を人差し指で搔いているヒイロに心底呆れたような表情を送る。

「私はお城に、行きたいの」

「……うん」

カレンの言葉にヒイロは生の返事で、それを返す。

「わ～た～しそはあ～、お城に送り届けなさいって言ったのーー!」

「…………うん」

ぴきりっと、カレンの何かが切れた。途端、カレンはヒイロの腹にグーで一撃を打え、ズビシッ！と田の前の光景に指を差す。

「じゃあ、なんで街の外？なんで田の前、草原、原っぱ？田町のお城は真後ろなんですけど？」

大声でヒイロに叫ぶカレンだが、当のヒイロにとって、それどころではなかった。先ほど、理不尽にも、いきなり殴られた自分の腹が悲しくも断末魔の叫びをあげて、痛みを放っているのだ。

ヒイロは、ぐおおおつーっ！と、その場にしゃがみ込んでしまう。

(「Jの、Jの女、Jの女は…人があ善意で、善意で送り届けてやつて
いるところの…）

感謝されこそ、Jのよつつな理不尽な暴虐を打えられる謂れば無い
はずだぞ！？ヒイロは、未だズキズキと痛む脇腹を抱える。

「なにしてゐのよ？ほら、行くわよ？私を送り届けるんでしょ？」

しかし、そんなヒイロの諸事情なんぞ知らぬ存ぜねといふ感じで、カレンは我が道を往くと来た道を引き返そうと振り返る。

「ぐつ、コノツ…！」

そんなカレンのわがままにヒイロも文句は山の様にあつたが、一度も腹を殴られたくない、ヒイロは何も言わずに引き返そうとする。

「主…？」

と、そんなヒイロに背中に差した魔剣アイゼルが声をあげる。その瞬間、アイゼルの声にヒイロは、ビクリと肩を上げて反応する。

「お前、馬鹿！？俺以外の人間がいる時に何を堂々と喋つてんだよ！？」

そう、アイゼルには自分以外の人間がいる時は言葉を話すなとき

つい言い聞かせてあつたはず。もししくせ、重要な事ならば小声でと
。だが、いまアイゼルは、そのどちらもせず、堂々と声を上げ
た。

「喋つて…る?」

|再び、ヒイロはクッと両肩を上げる。

ヒイロがおそるおそるカレンの方を見ると、やはり、桃色髪の少
女は背中に差した剣が言葉を話したのを見て驚いていた。

あちやー、ヒイロはなれにひなだれるように顔を下に向ける。

「ねつ、ねえ、あんた…それ?」

「ええ、ええ、そうね。ええ、そうなんです。喋るんです、話すん
です、声を放つ剣なんです…」

「……」あえて魔剣とは口が裂けても言わないヒイロ。

もちろん、それは得体の知れない者と見られないため。いや、確かにヒイロは、ぼろぼろの服を着ていて、住む所も無く、深夜の街中を徘徊しているので、その時点で街の憲兵が、そんなヒイロを見れば怪しい得体の知れない者を見るのだろうが……。

それに増しても言葉を話す剣などと。しかも、それが世界を支配できる魔剣なんて言われた日には、ヒイロは得体の怪しい奴から、世界をも脅かす魔王なんてものにまで飛躍的にクラスチェンジしてしまつ訳なのだ。

その為、ヒイロは口が裂けてもアイゼルを、ただの喋る剣なんです、としか言い様がなかつた。

「へ、へえ……」

と、意外に冷静なカレン。あれ? と、ヒイロはそんな世界を脅かす魔王なんて誇大妄想に被害妄想を考えていたのに案外冷静なカレンに驚いてしまう。どうやら、カレンは、そこまで喋る剣であるアイゼルに驚いた様子は無い。

「驚か……ないの？」

ヒイロは、おれのおれるとカレンにそつ問に掛けてみる。

「別に、その手のマジックアイテムなんて私が通う魔術学院に行けば、いくらでも見れるわー。自動で文字を画くペンや相手の欲望を映し出す鏡。ファイアーブレスを吐く盾に伸縮自在のマジックランス……」

喋る剣なんて、珍しくもないわ……ちょっと、驚いたけど……と、カレン。

なるほど、マジックアイテムですか……と、ヒイロは意外に驚かないカレンにホッとする。

確かに、魔剣アイゼルは、『この魔法や不思議溢れる世界でも喋る剣などは普通では無い代物』とは言った。が、普通では無いが存

在しない物とは言つていない。

「ヒィでヒイロは、再び安堵のため息をつく。なんだ、別に努めて隠す事柄でも無かったのか…。

「くつ、なにを悠長に馬鹿なやり取りをしている…主、敵だ！闇夜にて、白刃に狙われているぞっ！！」

「などと、今までの思い過い」と取り越し苦労に、やや安堵して、ため息をついたのも束の間、そんな、アイゼルが切羽詰まった声を上げた。瞬間、カレンの後ろの闇から光る鋭利な剣が横一閃に振り抜かされた。

「えつー…？」

カレンはその剣に気が付けず、その剣を避ける事が出来ない。ビシュー！ と、闇夜を破裂き剣がカレンを襲う。

「いっ！？」

それを真っ正面から見る事の出来たヒイロは、アイゼルの言葉もあつてか、咄嗟に背中に差した魔剣アイゼルを取りだし、横一閃に襲う闇夜の剣からカレンを守る。

ガギイン！！と交差した両刃はガチャガチャと拮抗を保つ。

そんな唐突の光景にカレンは『えつ、えつ、え？』と困惑うばかりで事態を把握しきれていない。いや、それはこの場にいるヒイロやアイゼルも同じであった。

いきなり、闇夜を切り裂くようにして現れた剣。そして、それを携える仮面の男。

「何だ、お前はあつ！？」

ヒイロが男を睨み付けながら、そう問い合わせる。すると、仮面の

男はヒイロの持つ魔剣アイゼルを跳ね上げて、腰を低くし、剣を構えて答える。

「怪人ギュソー…

銀色の仮面の男は、そっぽつりと咳き。

再び、その手に持つ鈍く光を放つ鉄剣でヒイロたちへと、襲い来る所以あつた…

第9話・君成す出逢いで、御用心！？（5）（後書き）

こんにちば。

行き当たりばったり小説の一つ、魔方陣に御用心の第9話田で「」ぞいます。

さて、感想・評価で「」指摘があつた様に、この作品は、とある作品に多大な影響を受けております。（まあ、うすうす気付いておられると思いますが（笑））

そんな訳で、この小説は、そのとある作品に似たり寄つたりの表現世界観キャラ像が出てくる事、多数。もちろん、パロディ路線では無いので、全てが似ている訳ではございません。

が、やはり、本家を愛する方々にとつてはお見苦しい点などが「」ぞいまして、大変、申し訳ないと思つております。

ですが、実は、この小説、他にも多数、参考としまして影響を受けている作品が御座いまして…。後々には、作者の独断と偏見と成行で、どの本家とも異なつたオリジナルになると考えておりますので、本家を愛する方々には、何卒の「」理解と「」了承の程をよろしくお願

い致したいと思つておつます。

今後とも、小説・魔方陣に御用心をよろしくお願ひ致します。では、
今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1260e/>

魔方陣に御用心！？

2010年10月9日01時43分発行